

The “Antenatal Tomb” と歌う女性 : George MacDonald のPhantastes における女性の声、身体、そして生命観

隈部, 歩
西南学院大学 : 助教

<https://doi.org/10.15017/6790857>

出版情報 : 九大英文学. 65, pp.41-80, 2023-03-31. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

The “Antenatal Tomb”と歌う女性
—George MacDonald の *Phantastes* における女性の声、身体、
そして生命観—

隈部 歩

序論

スコットランド生まれのヴィクトリア朝の作家 George MacDonald (1824-1905)は、1858年1月2日付けの彼の父に宛てた手紙の中で“*I am writing a kind of fairy tale in the hope it will pay me better than the more evidently serious work*” (Sadler 102)と述べている。僅か2カ月で書かれたというそのフェアリーテイルの名は *Phantastes* (1858)。後に C. S. Lewis (1898-1963)に“*What it actually did to me was to convert, even to baptize (that was where the Death came in) my imagination.*” (XXXVIII)と言わしめた、彼の代表作である。本作は、主人公の青年 Anodos が英国の成人の年齢である21歳の誕生日を迎えた翌日に物語が始まり、彼が Fairy Land で様々な体験をした後に、聖なる儀式を装った邪悪な人身供犠の悪を暴く過程で疑似的な死を経て、再び現実世界に戻るまでを描いている。Anodos の Fairy Land 滞在は21日であったが、彼にとってそれは今までの人生に相当する21年にも思われたのであった。¹

先行研究は *Phantastes* を Johann Wolfgang Goethe (1749-1832)の書いた *Wilhelm Meister* (1795-96, 1821-29)に代表される“*Bildungsroman* (教養小説)”と見做し、Anodos の成長に焦点を当てる傾向にある。例えば、本作の注釈者 Nick Page がイントロダクションにて“*Phantastes is a Bildungsroman, a story of personal development.*” (15)と明言している他、C. N. Manlove もまた“*Phantastes is a Bildungsroman, Anodos’s experience gradually bringing him nearer true selfhood and humility.*” (84)と述べる。更に、Bonnie Gaarden は“*Phantastes is, in the*

bildungsroman tradition of German Romanticism, a story of the spiritual maturation of a poet, a young man following the Way of Imagination.” (*The Christian Goddess* 26)と指摘して本作を Novalis (1772-1801)の *Heinrich von Ofterdingen* (1802)や E. T. A. Hoffman (1776-1822)の *The Golden Pot* (1814)と並置する(84)。彼らの様に“Bildungsroman”だと明確に定義しないまでも、これまで概して Anodos の成長、特に彼が「真の詩人になる」過程に重きが置かれて来た。それにより、従来の研究では女性像の考察において2点の問題点が見受けられる。第一に、先行研究は Anodos が Fairy Land で出会った女性達を彼の成長の促進者や指標として副次的な存在だと考え、彼女達自身について十分な考察をしていない。2点目は、Anodos の精神的成長—彼が「真の詩人になる」過程—に着目され、女性の身体・性が否定的に捉えられて来たことである。特にファム・ファタリス的な the Alder Maiden による誘惑や、the White Lady への Anodos のセクシュアルな欲望を伴う所有欲やその放棄といったエピソードに言及がなされ、²1つ目の問題点と同様に、この観点では女性達は Anodos の成長の契機をもたらす副次的な存在に過ぎない。この様に、先行研究は女性達を主体的に考察していなかっただけでなく、男性主体の二分された—男性にとって良いか悪いかで分類された—対極的な女性像へと単純化して来た。また、女性身体・セクシュアリティの否定は、本作品における生命観—誕生や成長、限りあるこの世の生への考え方—の軽視に繋がりがかねない。

確かに、元牧師でもあった MacDonald は敬虔なキリスト教徒であり、キリスト教的な死生観「死後のより豊かな生」を多くの作品に描き込んでいたため、J. R. R. Tolkien (1892-1973)が“Death is the theme that most inspired George MacDonald.” (68)と指摘した通り、「死」は彼の作品を読み解く上で最も重要なテーマの1つだと言えよう。特に *Phantastes* では Anodos が第23章で邪悪な人身御供の儀式の正体を暴き、狼のような怪物と相打ちして疑似的な死を経た後に味わった、母なる大地との合一の至福の状態や無私の愛の境地が実に印象的に描かれているため(190-92)、MacDonald 作品に散見される「良き死」や「死後のより豊かな生」に注目されて来た。³しかしながら、*Phantastes* 出版前後ほど、MacDonald の身に死と誕生が交互に降り掛かった時期は他に無いため、⁴死への考えだけではなく、彼の生命観を読み解くことは作品のより

深い理解のために必須だと言えよう。

本稿の目的は、従来 Anodos の成長の促進者・指標として副次的に見られて来た女性達を主体的に考察して女性像に新たな光を当てると共に、見過ごされた生命観を明らかにすることである。ここで注目するのは、the White Lady が閉じ込められていた“antenatal tomb” (37)と「歌う女性」である。まず“antenatal tomb”についてであるが、これは P. B. Shelley (1792-1822)が“The Sensitive Plant” (1820)で用いた表現への言及である。⁵ Anodos は the White Lady が閉じ込められていた雪花石膏を“antenatal tomb”と見做すのであるが、それを“her tomb or her cradle” (115)とも表現しているため、本稿ではこの「誕生前の墓」を産まれていない／真の意味で生きていない＝死のような状態として定義する。⁶ この語からは Anodos が「誕生前の墓」に閉じ込められた彼女を歌によって解放することで、彼女に生命を与えた＝生まれ出させたという自意識を表すと解釈される。⁷ そうして彼は自身を“her deliverer” (43)と見做すが、実は真の意味で生きていない彼もまた同様の状態であると言える。加えて、本作には他にも「誕生前の墓」に居る女性達が登場する。Anodos と女性達が「誕生前の墓」から解放され、生に向かう過程に着目することは、軽視されて来た女性像や生命観に光を当てるだろう。

次に、「歌う女性」に注目する意義を簡潔に述べよう。前述の通り、先行研究では Anodos の「詩人としての成長」に重きが置かれており、それに伴い彼の歌った歌に注目されがちであるが、実は本作品では「想像力」と女性に密接な関連性があるだけでなく、「歌う女性」が複数登場しているのは見逃せない事実である。多くの研究者が指摘する通り Fairy Land は想像力の世界とされるが、⁸ MacDonald は想像力を神の創造に準ずる働きとして見做し、特に詩(歌)を想像力から産み出される最初の言語として重視しているため、本作の理解に欠かせない要素である。

To inquire into what God has made is the main function of the imagination. ...
The imagination of man is made in the image of the imagination of God.
Everything of man must have been of God first; (“The Imagination” 311-12)

All words, then, belonging to the inner world of the mind, are of the imagination, are originally poetic words. ... Thus thousands of words which were originally poetic words owing their existence to the imagination, lose their vitality, and harden into mummies of prose. (313)

... while the imagination of man has thus the divine function of putting thought into form, it has a duty altogether human, which is paramount to that function—the duty, namely, which springs from his immediate relation to the Father, that of following and finding out the divine imagination in whose image it was made. (314)

従って、詩・歌(poetry)は神の創造物を最も近接的に表現する、或いは本質を表す上で人が用いる最良の言葉だと言える。⁹ よって本稿では、全ての生命の源である神に最も近いと言えるこの最初の言語を扱う「歌う女性達」、特に Anodos が第 19 章で出会う若い目—Anodos は彼女の目を“they were absolutely young—those of a woman of five-and-twenty, large, and of a clear gray” (138)と表現する—を持つ不思議な老賢女に着目し、「誕生前の墓」に留められた存在達の解放に焦点を絞りながら、主体的に女性を考察すると共に見過ごされて来た生命観に光を当てる。¹⁰

まず、ブナの木的女性(the Beech)と美しい珠を持つ the Maiden、¹¹ そして主に the White Lady が「誕生前の墓」に留められていることを概観し、Anodos との関わりでその状態に変化が起こる過程を考察する。その上で、Anodos 自身もその様な状態であることを、作中で何度も見られる彼の生の停滞や死への欲動の中に探り、彼が「歌う女性」the Wise Woman によって解放され、生に向かう様を明らかにする。更には、女性と歌(想像力)の密接な繋がりに言及した後に、彼女以外の「歌う女性」にも注目する。そして the Wise Woman が Anodos に the White Lady を単なる理想的美ではなく、身体(生命)有る存在として認めさせることも含め、彼女と他の女性達に見られる連関を明らかにする。女性達を Anodos 主体で考察するのではなく、彼女達自身の声、そして歌に耳を傾けることで、これまで軽視されて来た女性の身体性や女性同士

の関係、生命観を浮き彫りにするのが本稿の最終的な目的である。

I: 「誕生前の墓」に留められた女性達とそこからの解放

U. C. Knoepfelmacher は、MacDonald は女性を例えば“The Light Princess” (1864)の姫の様に“an anterior state of being”の状態に置くのを好み、それにより“his fascination with death and transcendence” (118)を表していると解釈する。彼の指摘する「存在前の状態」は、*Phantastes* の「誕生前の墓」にも当てはまると考えられるが、単に作者の死やそれを超えた生への固執を露わにするのではない。それは、後述する第 12 章の地球から遠く離れた天体—翻訳者の蜂谷昭雄氏は「土星」だと解釈している(139)—に住む、或る意味「誕生前の墓」にいる状態だと見做せる人々が、人間世界に生まれる前の存在だと示唆されることに見られる。つまり、存在前の状態に留められた者達は、「いかに存在し、生を生きるか」を表現したい作者の強い気持ちの表れだとも解釈されるのである。よって、本節では、女性達が「誕生前の墓」の中の状態でいかに不完全な・停滞した生を生きているか概観した上で、Anodos が彼女達をそこから解放するきっかけを与えたことを考察し、彼女達が作者の生命観を読み解く鍵を握る存在であると明らかにして行きたい。

i) The Beech

まず、Anodos が第 4 章で出会う the Beech について考察する。彼女は、吸血鬼と表現され男性的な食欲さと結び付けられる the Ash から Anodos を救い、¹² 彼に母性的な優しさを示す女性であるため、従来彼女の母的な側面が強調されて来たが、¹³ 彼女はそれだけに留まらない存在である。一般的に女性像の分析では、男性視点で二極化される傾向にあり、特にヴィクトリア朝では理想的な女性像である良妻賢母「家庭の天使」と、男性を誘惑し破滅させるファム・ファタル或いは男性権威を脅かす「新しい女」として、男性にとって良い／悪い女性として二分される。従って、Fairy Land で Anodos に母性的な愛を示し、恐ろしい the Ash から救った the Beech はファム・ファタル the Alder Maiden の対極に位置する母性的女性として見られがちである。しかしながら、彼女はこれから論じる通り「誕生前の墓」に居る未熟な存在である上、人間の女性になりたい願望や Anodos への恋心の様なものを示すため、

単なる「母」として見做すべきではなく、本作における単純に二分化できない複雑な女性像の一表現として注目に値する。

The Beech は Anodos を恐怖から守り、赤ん坊の時に母を亡くした彼に母性的な愛情を示して束の間の至福の状態を与える「母」を思わせる存在である。しかしながら、彼女は「木」に過ぎず、長い年月を生きてはいるものの、¹⁴ それは人の生に比べると単調で静的な未熟な生であり、彼女もまた the White Lady 同様に「誕生前の墓」に留まっている。それは、この森に伝わる“an old prophecy in our woods that one day we shall all be men and women like you” (29)にも明らかである。Robert Lee Wolff は、ドイツの神秘主義者達の抱いていた生命のヒエラルキーについての考え“trees were destined to become animals before they achieved human nature” (54)に言及している。そして Wolff は、本作で the Beech が動物の段階を省いて人間になりたい欲望を示していることについては、“It seems more likely that he [MacDonald] intended Beech to be a hamadryade, and thus for the moment only to echo the evolutionary theory of the German mystics while returning to the ancients for his main imagery.” (54-55)と但し書きを付け、木の生よりも、人の生が高次にあることを森に伝わる予言や彼女の「人間の女性」になりたい憧れの中に見出している。それは、Anodos が彼女と共に過ごした翌朝、ブナの木に戻った彼女の姿を“At my head rose its smooth stem, with its great sweeps of curving surface that swelled like undeveloped limbs.” (31, 強調引用者)と表現したことにも見ることができ、木である彼女は人間として生まれる前段階として「誕生前の墓」に居ると考えられる。¹⁵

The Beech について考察を進める前に、彼女が「誕生前の墓」に留まった存在であるという主張を補強するため、Anodos が Fairy Palace の図書館で読んだ書物を再現した形式を取る、第 12 章の遠い星の物語を考察する必要がある。この星では、女性は腕の代わりに翼を持っている他、赤ん坊は人間世界とは異なる産まれ方をする。丁度子供達が花を探しに行く様に、乙女達が森の中や川岸沿いに赤ん坊を探しに行き、突き出た岩の陰や灌木の茂み、丘の中腹といった場所で見付ける(84-85)。赤ん坊を見つけた乙女は、必ず最初に母親に“I have got a baby—I have found a child!” (84)と報告しており、これがこの星での出産方法なのである。男女は大人になってからはほぼ交流

することは無く、身体的な繋がりを持たず、上記の通り言わば自然が代理出産をしていると言えるため、この星では生命における身体性の不必要さを見ることができよう。また、女性のみが赤ん坊を見付け、それを最初に母に報告するのは、母娘の強い繋がりと共に、男性の生命に関する役割の無さを強調する。赤ん坊を見付けに行く若い女性について“girl”でも“young woman/lady”でもなく、「処女」をも意味する“maiden”という語がわざわざ使われていることも、生殖に関する性の不関与・生命への身体性の無さを補強する事実である。そして、この星に住む人々は、*At the Back of the North Wind* (1871)で Diamond が見た夢の中に登場する、人の生まれる前の姿だと思われる星を掘る天使達と同様の存在だと解釈される。¹⁶ なぜなら、the Beech の身体が“undeveloped limbs” (31)とされるのと同様に、この星の女性達についても“their wings, glorious as they are, but undeveloped arms” (87)と表現されており、彼女達もまた「誕生前の墓」に留め置かれ停滞した生を生きていると指し示すからだ。

Anodos はこの星の人々に「誕生前の墓」の状態から生へ向かうきっかけを与える。彼は彼らに人間世界での子供の誕生について質問されるが、大変多くの人々がこの話題について Anodos を質問攻めにしたことは(86)、彼らの「生への欲求」と受け取れるかもしれない。彼は明言を避けていたが、遂には人間世界ではこの星—自然の中に赤ん坊を見付ける—とは異なる産まれ方、すなわち、(作品中に具体的な説明は無いが)身体的な交わりによって産まれることに言及する。彼の答えに対して人々は強い反応を示す。

Immediately a dim notion of what I meant, seemed to dawn in the minds of most of the women. Some of them folded their great wings all around them, as they generally do when in the least offended, and stood erect and motionless. One spread out her rosy pinions, and flashed from the promontory into the gulf at its foot. *A great light shone in the eyes of one maiden, who turned and walked slowly away, with her purple and white wings half disspread behind her. She was found, the next morning, dead beneath a withered tree on a bare hill-side, some miles inland.* (86, 強調引用者)

この場面で、注目すべきことに Anodos は女性達の反応にのみ言及している。前述の通り、この星での生命伝達—自然による代理出産—において女系の役割のみ明示されることに加え、自然の中での男女の対照的な活動—自然の中で赤ん坊を見付けたり海の中で活発に遊んだりする女性に対し、男性は不活発さが強調される(86)—、生まれた時の四季・自然を反映する女性達の翼(85)は、彼女達が自然とより強く結び付くことを示す。前述の通り、女性達の翼は「未発達達の腕」であり、彼女達が「誕生前の墓」に居ることを思わせる特徴であるが、赤ん坊をもたらす自然=母=生命の源との繋がりをも示すものであり、彼女達の身体性・生命を最も明示するとも考えられる。そして、Anodos の言葉に対する女性達の異なる反応は当時流布していたジェンダー観や作者の考えを反映している。大多数の女性が Anodos の身体的・性的な含蓄を含む答えを好まず、翼で顔を隠したことは、当時の性を感じさせない理想的な良妻賢母像“the Angel in the House”の反映と言える。実際彼女達は天使と見紛う様な美しい翼を持ち、Anodos が人間世界の女性達は翼ではなく腕を持っていると彼女達に伝えた際に、彼女達は目を丸くして“how bold and masculine they must look” (87))と述べる。従順な「家庭の天使」との連関が見られ、ヴィクトリア朝的倫理規範—淑女はセクシュアリティ—について知るべきでない—が垣間見られよう。だが同時に、或る乙女が Anodos の言葉を受けて強い憧れを持ったのは重要である。彼女はその後死んだ状態で発見されるが、この星での「死」は人間世界での誕生であることが示唆されており、生命・身体・性への憧れや強い欲求が、産まれ出る契機となるのだ。

この星では、死の兆候や原因が“an indescribable longing for something” (87)であり、特に“When a youth and a maiden look too deep into each other’s eyes, this longing seizes and possesses them” (87)と男女の恋に言及がなされる。その後彼ら是一緒になるのではなく、それぞれ別の場所で亡くなるのであるが、Anodos は“it seems to me, that thereafter they are born babes upon our earth” (87)と結論付ける。前に引用した、人間世界での誕生についての Anodos の言葉を聞いて生命への強い気持ちを抱いた乙女のエピソードからも分かる通り、MacDonald が女性のセクシュアリティ・身体性というタブーに取り組んでいることが窺われる。これは後述する、大変エロティックだと多くの研究者

に指摘される、the White Lady の身体を顕現させるために彼女の身体を足から頭まで歌い上げた歌や、John Ruskin (1819-1900)にセクシュアルで不適切だと評された“The Light Princess”の姫と王子の湖での水浴シーンにも表れているだろう。¹⁷ よって、時代にやや反した描写が散見される、MacDonald 作品における女性のセクシュアリティや身体性はもっと注意を払うべきテーマだと言える。この星の人々が生まれた時と同じ様な場所で亡くなることも(87)、ここでの「死」が人間世界での「新たな生」と見做せる要素である。At the Back of the North Wind では、天使達が星を掘り出した穴に飛び込むことが「誕生」のメタファーとして描かれているが、彼らは自ら星を掘り、自分の気に入った色ものを見付けた時のみその穴に飛び込んでいる。死や死後の生に着目される MacDonald ではあるが、これらのエピソードは彼の肯定的な生命観—産まれ出たいという強い気持ち・憧れ—を読み取ることができる。

遠い星の人々、特に翼を持つ女性達に、Anodos が人の世—身体を具えた生命—への強い憧れをもたらしたのと同様に、彼は「誕生前の墓」に居る無性的・静的な生を生きる the Beech に「人間の女性になりたい」気持ちを強めさせる。彼女は Anodos に出会った時と別れる直前に“I may love him, I may love him; for he is a man, and I am only a beech-tree.” (28, 31)と繰り返し歌う様に述べており、彼に恋心の様な気持ちを表明する。遠い星でも、人間世界に産まれ出るきっかけとして前述の通り男女の恋に明白な言及がなされており、彼女の気持ちはそれに類似する様にも思われる。だが、the Beech の Anodos への思いは単なる男女の「恋」とは言えないだろう。なぜなら、彼女は Anodos に対して“Shall I be very happy when I am a woman? I fear not; for it is always in nights like these that I feel like one. But I long to be a woman for all that.” (29)と述べてブナの木ではなく人間の女性になりたい気持ちを露わにしており、先の引用の恋心の表明と取れる言葉も、彼を愛するかもしれないのは“for he is a man”だからであり、人間の身体を具えた生命への憧れだと受け取れるからである。遠い星の物語でも、実は人間として産まれ出る上で必要なのは、必ずしも男女の(セクシュアルな感情を伴う)恋愛だけに留まらない。Anodos の言葉により“an indescribable longing” (87)を引き起こされてその星で「死」を迎えた乙女や、本章の最後に述べられる、秋の終わりに生まれて長く終わらない冬を

生きる乙女が春を求めて一季節が生死になぞらえられるため、冬＝死、春＝生命とも解釈される一旅に出て亡くなったエピソード(87-89)に見られる様に、広く「生命」への欲求だと解釈されるのである。春・生命を求めて旅に出た乙女も最後亡くなるのであるが、Anodos は彼女についても“I almost believe that a child, pale and peaceful as a snowdrop, was born in the Earth within a fixed season from that stormy afternoon.”(89)と述べる。彼は、人間世界に「誕生」するであろう彼らのその後について、“if, when grown, they find together, it goes well with them; if not, it will seem to go ill. But of this I know nothing” (87)という風に人間世界での生の不確かさを述べる。同様に、the Beech から、人間の女性になったら幸せになれるか尋ねられた時も彼は“I could hardly say whether women were happy or not. I knew one who had not been happy” (29)と答えている。しかしながら、the Beech は完全に幸せにはなれないかもしれないが、それでも人間の女性になりたいと述べている。彼女の強い憧れは、木の精としての永遠的だが単調な生ではなく、悲しみも有るかもしれないが、喜びにも溢れた身体有るこの世の生の肯定として読めるだろう。それは、Anoods が Fairy Palace に向かう小舟の中で聞いた音楽に“As in all sweetest music, a tinge of sadness was in every note”を認め、“Nor do we know how much of the pleasures even of life we owe to the intermingled sorrows. Joy cannot unfold the truths, although deepest truth must be deepest joy.” (71)という風に、人生における喜びと悲しみの両方の重要性に思いを馳せたことに、the Beech の言葉を補強する作者の生命観を見ることができる。後戻りができないという Fairy Land で(55)、Anodos は自身の旅を完遂するため彼は“my unfinished story urged me on” (31)と考える—the Beech の許を去る必要が有ったので、彼女が人間の女性になった時にどこかで会える可能性について思いを巡らすものの(32)、彼らは遠い星の男女の様に強い気持ちで見つめ合い、それぞれの場所で「亡くなり」人間世界へ共に「誕生する」のは叶わなかった。しかし、彼は the Beech に人間の生への気持ちを強くさせた点で「誕生前の墓」から解放する一助となっており、彼女の強い憧れは本作における身体性や人の生命への肯定の一表現だと考えられる。

ii) The Maiden

次に「誕生前の墓」に留められた女性として考察するのは、美しい光と音を発する珠を持つ the Maiden である。MacDonald は「成長を止められた少女」像を作品で度々描いており、対となる少年達と比較した彼女達のより困難な成長は、生の困難さと女性になることの困難さの両方を表すため、作者の生命観や女性像を読み解く鍵となる。¹⁸ 特に、大人と子供の境目の年齢に設定された“The Light Princess” (1864)の姫(17 歳)と“The History of Photogen and Nycteris” (1879)の Nycteris(16 歳)はこのテーマを如実に示すだろう。*Phantastes* の the Maiden は年齢にはっきり言及されないものの、姫と Nycteris 同様に“she seemed almost a woman” (65)であり、「成長を止められた少女」像の原型だと言えるため、注目に値する存在である。

自然が代理出産を行っていると考えられる遠い星にて、赤ん坊を見付けに行くのは“girl”でも“young woman/lady”でもなく「処女」をも意味する“maiden”であることは、この星での生殖に関する性の不関与や身体性の無さを補強する事実だと述べたが、Anodos が出会った美しい珠を持つ女性が“a little maiden” (65)とされているのも、同様のことが言えそうである。これは、彼らが 3 日間共に旅をしていたが、毎回日没になると彼女が Anodos の許を去り翌日の正午に合流していた(65)とわざわざ明記されていることにより強調される。彼女が成長を止められ、未熟な生を生きていることは、Anodos の“*She came along singing and dancing, happy as a child, though she seemed almost a woman. ... I felt a wonderful liking to the child—for she produced on me more the impression of a child, though my understanding told me differently.*” (65)という言葉からも窺い知れる。彼女は“*her plaything and her greatest treasure*” (65)だと思われる水晶の様な美しい珠を持ち、それに没頭している様子である。一緒に旅を初めて 3 日目に、Anodos の「影」が the Maiden を包んだ後、彼は“*my desire to know about the globe*” (65)を抑えられず、彼女の懇願を無視して、彼女が大事に抱えている珠を強く触り続けてそれを割ってしまう。

Anodos の the Maiden(の珠)への暴力的な行為はネガティブに受け取られうるが、実はこれは the Maiden に「誕生前の墓」から出る契機を与えるものであった。見た目は大人の女性の様なのに子供の状態のままであり、美しい光と音を発する珠に専心する the Maiden の様子は、MacDonald が人の成長につ

いて述べた評論“A Sketch of Individual Development” (1880)の最初期の状態—母と不可分の状態であり、母に全てを与えられ満足しており、自分(と母)の満たされた世界にのみ没入し、周りの存在を未だ知らない未熟な段階(24-25)—に類似している。The Maiden と同様の状態に留まっていた少女として、“The History of Photogen and Nycteris”の Nycteris が居る。彼女は全てを知りたいと望む魔女 Watho の実験により、産まれた時から城の地下墓地に閉じ込められ、夜(闇)しか知らない様に育てられた。本作では昼(光)／夜(闇)=生／死という図式が有るため、外界の昼も夜も知らない彼女は生と死の両方に無知のままであり、誕生前の存在に留められていたと言える。そして彼女は、唯一与えられた天井のランプの光が彼女に全てを与えてくれる様に感じ、そこから外へ出ることを思い付きもしなかった。よって、“A Sketch of Individual Development”における母と同じ役割を持たされているのが Nycteris のランプであり、the Maiden の珠だと考えられる。Nycteris は、或る日突然地震が起きてランプが壊れたことにより外界へ「産まれ出る」＝「誕生前の墓」から出る契機を与えられることとなった(*The Complete Fairy Tales* 310-12)。¹⁹

The Maiden もまた、Nycteris と同様に、Anodos に期せずして珠を割られたことで成長する。だが the Maiden の場合は、複数の研究者が指摘する、この場面におけるセクシュアルな含蓄にも注意を払う必要が有るだろう。泣きながら懇願する彼女の珠が Anodos に割られる場面について、例えば本作の注釈者である Roderick McGillis と John Pennington は“*It is an excellent example of how Victorian writers dealt with delicate, even taboo, subjects. ... The action here is akin to a deflowering of the young girl, a rape. And the breaking of the globe is akin to the tearing of the hymen.*” (66)と述べる。Wolff も同様に、“*The episode of a little maiden’s globe can easily be interpreted sexually: the breaking of a bowl or pot is a symbol universally understood, and the girl’s preference for gentle treatment is entirely clear.*” (67)と指摘する。再会した彼女は“*a beautiful woman*” (174)となっていたため、珠を割られたことは大人の女性になるための痛みを伴う通過儀礼の様なものとして捉えられうる。また、先に彼女の珠と全てを満たす母との類似を述べたが、the Maiden の成長は「娘の母からの自立」と捉えることも可能であろう。Marianne Hirsh は、ギリシャ神話の Demeter と Persephone

の物語を“not only the story of intense mother-daughter attachment and separation, but also the story of both the mother’s and the daughter’s reactions and responses”を示す「本物の母と娘の物語」であるとしながらも、“This unique mother-daughter narrative exists, however, only as a function of male intervention.” (35)と指摘する。つまり、満たされているが或る意味「停止した」母娘の物語は、異性の侵入、すなわち冥界の王 Hades の Persephone 誘拐により「静」から「動」の状態になり、時間と物語性が初めて動き出すのである。この「停止」状態は、本稿における「誕生前の墓」と類似する。従って、Anodos の珠破壊に付随するセクシュアルな含蓄は「異性愛の侵入」要素を強めるものだと考えられる。この場面に“an undeniably sexual undertone”を認める別の版の注釈者 Page は、“MacDonald, although working within the conventions of the Victorian world, was not coy about sex and its potential both for good and evil.” (119)と指摘する。暴力的に見られる Anodos の行為は、実は Hades が Persephone に対して行ったのと同様に、the Maiden の満たされているがそこで静止した状態に「動き」をもたらし、成長を促したと考えられる。²⁰

The Maiden は再会した時に、彼女の珠を割った Anodos に感謝を述べており(174)、彼の行為により彼女の止まっていた生命が動き出して成長したことが分かる。それは、第 III 節で詳述するが、彼女が「歌う女性」になっていること—彼女は“I have something so much better. I do not need the globe to play to me; for I can sing.” (174)と述べる—や Anodos の言葉“The light and the music of her broken globe were now in her heart and her brain.” (175)にも明らかである。更には、これまで“a little maiden”や“the child”と表現されていたが、再会した際の彼女はすっかり大人の女性に成長をし、“a beautiful woman” (174)と言及され Anodos は最初、彼が珠を割ってしまった the Maiden だと認識できないほどである。彼は彼女に以前出会ったことを言われて初めて、“now fully recognised the face of the child, glorified in the countenance of the woman” (175)と述べている。痛みを伴う経験ではあったが、the Maiden は Anodos により「誕生前の墓」から解放され、大人の女性へと成長したのである。

iii) The White Lady

最後に、本稿のキーワードとして用いている“antenatal tomb” (37)に閉じ込

められた the White Lady について考察する。第 5 章で洞窟内の雪花石膏に閉じ込められた彼女と出会って以降も Anodos には様々な出来事が起こるが、彼が歌によって解放した the White Lady を追い求めるのが物語の主筋となっているため、彼女はプロットの一貫性の無さを度々指摘される *Phantastes* を貫く一本の糸を成す存在である。洞窟でのエピソードから、従来の研究では Anodos と the White Lady の関係性を芸術家と芸術作品のそれと見做し、彼が彼女の存在を認め所有欲を放棄する過程を彼の詩人としての成長を示すものだと解釈されて来た。例えば Jung 派の心理学を用いて女性像を類型化する Joseph Sigman は、4 つの元型的な女性像“the good mother, the terrible mother, the muse, and the temptress” (29)に言及し、the White Lady を 3 つ目のミューズと見做す。加えて Sigman はこの場面における、芸術家の伝統的な類型である Pygmalion や Orpheus と Anodos との結び付けや、19 世紀にしばしば見られた理想美の象徴としての女性のイメージである大理石の像を指摘して、“The Marble Lady is, therefore, an anima figure, and the scene of her discovery seems to derive from similar scenes of artist’s vision of his ideal in the work of Shelley and Novalis.” (30)と考察する。Gaarden は、Anodos と the White Lady や the Alder Maiden との出来事を MacDonald が“The Imagination”で論じた想像力についての考えのアレゴリーの様に捉え(“George MacDonald’s *Phantastes*” 294)、Anodos の理想の女性とされる the White Lady を“his anima, the Jungian ‘inner woman’”、或いはより古い用語で“the personification of his Muse” (295)と見做す。続けて Gaarden は、the White Lady をアニマとして同定することは、Anodos が彼女に魅了されたこと(fascination)と最終的に彼女を性的な愛の対象として諦める必要性の両方を説明すると述べ、“As part of himself (in imagery of the book, almost his own child) the White Lady, like Anodos’s grandmother, is not an appropriate object for a mature, sexual love.” (295)と結論付ける。確かに本作で鍵を握るテーマ「想像力」を the White Lady に当てはめるこれらの研究には説得力が有るが、これから見る通り the White Lady は単なる「想像力」の権化としてアレゴリー的に捉えるべきではなく、²¹ 彼女を身体を具えた女性として見做すことで作品の女性像や死生観に新たな光を投げ掛けることができる。

第5章で Anodos が洞窟の中で the White Lady に出会った時、彼女は「誕生前の墓」と表現される雪花石膏の中にいるだけでなく、彼女自身も無機質な大理石になっている—彼女は理想的美と生の無さの両方を象徴する“the white lady”の他、度々“the marble woman/lady”とも言及される—ため、生が止まった・死んだ様な生を生きる未熟な存在だと言える。これは、Anodos が彼女を閉じ込める雪花石膏を“her alabaster tomb” (36), “her tomb or her cradle” (115)と表現している他、後に彼が the Wise Woman の小屋の2つ目のドアから出て彼女と夫である騎士の様子を見守っている時、彼らが洞窟の中での彼女の状態を“the death-sleep of an evil enchantment” (148), “worse than death” (149)と言い、Anodos が彼女をその様な「死」の状態から起こして救い出してくれたと述べていることから明らかである。

第5章の冒頭に付されたロマン派の詩人 Thomas Lowell Beddoes (1803-49) の“Pygmalion” (1825)からの引用や、この洞窟内に自らが創り出した女性の像が動き出すのを待つ Pygmalion を模した“a strange, time-worn bas-relief” (34)が側面の岩に掘られていることから明白である様に、Anodos は the White Lady を自身の理想が投影された・自らの想像力で産み出した芸術作品の様に見做し、この時点では彼女を身体を具えた女性とは捉えていない。²² 加えて、彼は歌の中で彼女の状態を“In the death of dreams” (37)と呼び、彼女を起こすには“primal Death” (38)に立ち向かう必要があることや、彼女に向けて“Or art thou Death, O woman?” (39)と呼び掛けていることから、彼女と「死」との結び付きが強調される。しかしながら、Anodos が、「誕生前の墓」で死の眠りを眠る the White Lady を解放するために、眠り姫を起こした王子のキスは雪花石膏の前では不適當であるためどうすべきか考えあぐねていた際に Orpheus について思い至ったのは注目し値する。ここでは豎琴を弾きながら歌う Orpheus に自然さえも魅了され、彼に石がついて行ったエピソードに直接的な言及がなされているが(37)、Orpheus と言えば妻 Eurydice を生き返らせるために冥界へ下ったエピソードを思い出さずにはいられない。²³ これは、第19章にて the Wise Woman が Anodos に歌い掛けた歌の1つが、正に死んだ妻 Eurydice を蘇らせようとして失敗した Orpheus を思わせる、Sir Aglovale とその妻 Adelaide の物語であることにより補強される(139-44)。The Wise Woman

は、次節にて詳述する通り、歌で Anodos の状態を表したり、彼に様々なことを教え慰めを与えたりするため、Sir Aglovale と Adelaide の関係性は Anoods と the White Lady と密接な関連を持つと受け取って良いだろう。そのため、Anodos の歌に「死」が色濃く描かれているのは、同時に「生命を与えたい／生の状態に戻したい」強い気持ちの表れだと解釈される。加えて、洞窟は伝統的にしばしば「子宮」の象徴とされ(Walker 330)、MacDonald 作品でもその様な描写が見られる上、²⁴ MacDonald 作品では生命と密接な関わりを持ち、本作でも Anodos の誕生・新生を示唆する「水」がこの洞窟内に湧き出していることや、彼が the White Lady を救い出そうとするのを「出産」の意味も持つ“labour”(35)と表現したことから、この場面は「誕生」イメージに満ちている。²⁵ 以上述べたことにより、Anodos は、未だ不十分ではあるものの彼女に生命を与えた・産まれ出させたと言うことができるだろう。

次に、the White Lady の身体性を考える上で鍵を握る、Fairy Palace で Anodos が彼女の身体を顕現させた歌(119-23)について考察する。彼は、Fairy Palace の中心にある広間で the White Lady の存在を強く感じ、目に見えない彼女を身体化させるために、彼女の足から頭の先まで歌い上げる。そうして彼が歌うにつれ、ヴェールが下から上げられて行くかのごとく、彼女の身体が彼の前に現れるのであった。以下、当時の感覚として最もセクシュアルだと思われる部分である脚と臀部・腹部を引用する。

Feet of beauty, firmly planting / Arches white on rosy heel!
Whence the life-spring, throbbing, panting, / Pulses upward to reveal!
Fairest things know least despising; / Foot and earth meet tenderly:
‘Tis the woman, resting, rising / Upward to sublimity. (119)

Bands and sweeps, and hill and hollow / Lead my fascinated eye;
Some apocalypse will follow, / Some new world of deity.
Zoned unseen, and outward swelling, / With new thoughts and wonders rife,
Queenly majesty foretelling, / See the expanding house of life! (120)

画家達が女性の裸を描く口実として聖書や神話にそのテーマを求めた様に、Anodos もまた、女性を神格化する様なイメージを混ぜながら聖／性が混合された女性身体を提示している。Wolff は“*This song achieves the effect it describes, and lifts the veil. And no wonder! Few poems so explicitly and thoroughly erotic can exist in English.*” (85)と云って、当時としては大胆なこの歌の持つエロティックさを指摘する。Helena Michie は、ヴィクトリア朝では、身体的に魅力的なヒロインの描写が多くなされているが(85)、*dead metaphor (cliché)* や *synecdoche*、*metatrophe* といった比喩表現の多用により、彼女達の身体性が奪われていると論じる。²⁶ 例えば、Michie は類で種を、一部で全体を表現する比喩“*synecdoche*”は、女性身体をばらばらにすることで女性から身体性を奪うと述べる。Michie によると、ヴィクトリア朝の小説では“*language fragments itself as it fragments the female body it undertakes to describe*” (97)であり、統一された「女性身体」の表現の削除をリストアップするのは“*a long, tedious, and doomed project*”であろうと述べ、その代わりに、1つの節を割いて“*the imitatively synecdochal operation of concentrating on presence to suggest absence; it detaches from the heroine’s body the hair and the hand and arms, isolating and fetishizing these parts.*” (98)を考察している。確かに Anodos の歌でも比喩表現は多用され、*the White Lady* の身体を部分に分けて歌っており、身体性が奪われていると言えるかもしれない。しかしながら、彼は足から頭まで *the White Lady* の全身を歌いあげていることから、彼女の身体の統一性は保たれており、読者に彼女の身体へ注目させる効果がある。身体化した彼女を Anodos は触れることを許されず(113)、触れた瞬間逃げられて叱責される(125)上、この時点で彼女の身体は“*I cannot tell whether she looked more of statue or more of woman*” (124)であり、完全に身体を持った女性になるには、第 III 節で考察する通り *the Wise Woman* の助力が必要となるが、彼女の身体を顕現化したということで「*誕生前の墓*」から解放する更なるきっかけを与えたと言えよう。

多くの研究者が指摘する通り、*the White Lady* は Anodos の理想的美であり、彼にインスピレーションを与える「ミューズ」の様な側面を持つ。しかしながら、同時に、注釈者の McGillis と Pennington が“*Anoods’s song acts both as a creative force and a strip tease. It is remarkable in its erotic intensity. At the end, like*

Pygmalion's creation, the woman stands before Anodos naked and alluring.” (122-23)と指摘する通り、AnodosがFairy Palaceで歌った歌はセクシュアルな側面が露わにされている。この歌は彼女の身体全てを歌い上げるものであり、それに合わせて彼女の身体が現れたことから、彼女は精神性だけでなく、もっと生々しい、身体を具えたもの、すなわち生／性に彼を直面させる存在でもあるのだ。それを直視した時にAnodosは成長することができ、生に向かい真に生きられる様になる。彼はthe White Ladyを「誕生前の墓」と呼ばれる雪花石膏から解放し、身体を顕現させて生命ある存在へと戻したと言えるが、真の意味で彼女を身体化して彼に生・性を直面させる存在となるには、第III節で詳述する通り、the Wise Womanの登場を待たねばならない。

II: 「歌う女性」The Wise WomanとAnodos—「誕生前の墓」からの解放

i) 「誕生前の墓」に居るAnodos—停滞した生、死への欲動

前節でAnodosが「誕生前の墓」に居る女性達をいかに解放した(そのきっかけを与えた)かを論じたが、実は彼自身そこに留まっており、そこから解放される必要が有る。本節では、Anodosの状態を、作中で散見される彼の停滞した生や死への欲動に着目しながら概観し、「歌う女性」the Wise Womanが彼を解放する過程を考察する。彼の停滞した生は、両親を含む先祖との繋がり無しに明白に現れる。物語は、成人となった彼が父の家督を受け継ぐ場面で始まるが、彼は父の書斎に入った際に“Perhaps I was to learn how my father, whose personal history was unknown to me, had woven his web of story”と述べ、受け継がれる財産についても“coming down from strange men, and through troublous times, to me who knew little or nothing of them all” (2)と考えており、彼の父や先祖との疎遠さが露呈される。加えて、彼の妖精の祖母が言う通り、彼は女性の先祖について全く言及をせず、“know very little about [his] great-grandmothers on either side” (5)だと考えられる。彼には妹が居るので、父は再婚したことが分かるが、彼は義母の存在に一度も言及することは無く、妹についても妖精の祖母の質問に答えただけであり(5)、実母についても妖精の祖母の目に見入った際に、赤ん坊の時に亡くなったのを思い出すのみである(5)。

生命を与えてくれた両親との断絶は、彼の不活発な生の要因の1つだと考えられる。*Lilith* (1895)では、Adamの前妻であるLilithは神が創った「最初の女」として父も母も居ない上、神から生命を与えられた事実さえも拒絶し(200)、自己創造の幻想の下“*Life in Death*” (205)を生きていた。AnodosはLilithの様に生命を与えられた事実を否定することは無いが、肉親だけでなく先祖とも断絶した彼には、ややLilithに通じる部分が有ると言えよう。Max Keith Suttonは、Heinz Kohutの自己心理学に着目し、成長の基盤となる“cohesive self”を確立するのに必須の役割を果たす母の不在に言及して“*He grows up with no mother to serve as a ‘mirror’ and help him gain a strong self-concept by loving attention and encouragement.*” (125)と述べ、父もまた“*the lack of ‘mirroring’*” (125)を補填する別の経験を与えられず、Anodosは確固とした自己の無い不安定・不活発な生を生きることになったと述べる。The Wise Womanは彼の両親ができなかった“*mirroring*”の役割を果たし、Anodosに自己を確立させて生に向かわせる一彼を「誕生前の墓」から解放する。

彼が「誕生前の墓」に居るのは、作中で散見される彼の自殺願望と取れる死への欲動に見ることができる(69, 134-35)。The White Ladyを「誕生前の墓」と表現される雪花石膏から解き放った歌でも「死」が色濃く反映されていた(38-39)。前節で述べた通り、これはOrpheus的な、愛する女性を死の状態から生に回復させたいという「生命」への強い欲求の表れでもあるが、彼は彼女に掛けられた魔法が自身にも掛かって一緒に眠りにつきたい願望も露わにしている(38)。彼女の眠りは“*the very death of dreams*” (37)や“*the death-sleep of an evil enchantment*” (148)と表現されていることから、彼の願望は死に囚われた生命観を垣間見させるものとも言えよう。加えて、Fairy Palaceで“*TOUCH NOT!*” (113)という城での警告を破って顕現化したthe White Ladyの身体を抱き締めたことにより、彼女がAnodosを“*You should not have touched me!*” (125)と詰って彼の許を去った後、彼は陰鬱な気持ちで旅を進め、岬に到達した時点で自殺願望を露わにし、海に飛び込む(134)。注釈者のMcGillisとPenningtonは、死はMacDonald作品における重要テーマであるとしながらも、この場面について“*Anodos attempts to kill himself, which in MacDonald’s world defies the sanctity of death as life, where death is something that must be earned after a journey*

through life” (135)と指摘する。彼の行為は、生に疲れて死に向かうという、MacDonald が否定的に捉えていた生き方の典型例であり、*Lilith* の結末部で Vane が出会う、生きるのに疲れて Eve の死の家に行くのを所望しながら断られうなだれている老人に通じる(224-25)。本当の意味では生きていない、不活発な死の様な生を生きる Anodos もまた、「誕生前の墓」から解放される必要が有る。

ii) Anodos を「誕生前の墓」から解放する「歌う女性」the Wise Woman 「歌う女性」の伝統的なイメージと言ってもまず思い浮かぶのは、ギリシャ神話(特に Homer の *Odyssey*)における、男性を誘惑し、時に破滅させるファム・ファタルの典型であるセイレーンであろう。しかしながら、the Wise Woman は歌うことで Anodos に教訓や慰めを与え、道を示す存在であるため、セイレーンの様な歌うファム・ファタルとは対極的な存在である。以下、彼女の小屋にある4つの扉の内3つの扉から出て様々な経験を経て彼女の許に戻った Anodos に対して彼女が歌い掛けた歌に着目し、彼を「誕生前の墓」から解放した過程を考察する。

Anodos は彼女の小屋にある扉から出て様々な経験をし、彼女の掌に浮かび上がったのと同じマークの付いた扉から彼女の許へ帰ることができる。円の様であるが左右に隙間の空いたこのマークについて、McGillis は“the idea of an open circle”を反映するものであり、“The sign [of her door] suggests embrace, but not enclosure.” (“The Community of the Centre” 56)と指摘する。これは彼女の Anodos に対する姿勢をも表しており、彼が学ぶべき愛の形でもある。1つ目の扉から出た Anodos は少年時代に戻り、父の領地の納屋近くで弟達と遊び楽しい時を過ごす。その夜彼と彼のお気に入りの弟は些細な事で喧嘩をし、その翌日弟が川で溺死したことやこれが過去の出来事の追体験だと悟る。帰って来た Anodos に対して the Wise Woman は“Form, with its brightness, / From eyes will depart: / It walketh, in whiteness, / The halls of the heart.” (147)と歌い、死んだ後も、愛する者の存在・愛が残りを続けることを歌う。Sutton は Kohut の精神分析に言及しながら“any progress toward healing depends less upon interpreting the old experiences than upon ‘repeatedly’ reliving them” (127)と指摘し、the Wise Woman はセラピストの様な役割を果たすと述べる。弟の死の原

因が自分なのではないかという罪の意識は、無意識の内に自分の生を否定的に捉え Anodos の停滞した生に繋がっていたと考えられるが、彼女のお陰で抑圧していた過去と対峙して再び生き(relive)、弟が自身の中に生き続けることを悟った彼は、生と死の両方を受け入れられる様になる。

2つ目の扉から出た Anodos は、彼が物語中ずっと追い掛けていた the White Lady が、Sir Percivale を思わせる騎士の妻だという事実を知る。The Wise Woman と the White Lady の連関や the White Lady の身体性については次節で詳述するため、ここでは Anodos が the Wise Woman の歌により学んだことを簡潔に述べる。今回 the Wise Woman は、Anodos が至るべき愛の境地、すなわち愛を受ける“a cistern of love”ではなく、愛を与える“a well of love” (150)であれ、と彼に歌い掛ける。彼女の歌を聞いた彼は“loving the white lady as I had never loved her before” (150)とを感じる。この愛の境地は、前述した小屋のマークが表す“embrace, but not enclosure” (McGillis “The Community of the Centre” 56)という the Wise Woman の彼への愛にも類似している。後に Fairy Land で疑似的な死の状態にある Anodos は、“I knew now, that it is by loving, and not by being loved, that one can come nearest the soul of another” (191)と考へ、the Wise Woman から学んだ愛の境地を獲得しており、人々に“love that healeth” (192)を示せる様になっている。

3番目の扉を出た Anodos は、彼の元恋人だと示唆される一恐らく彼が the Beech の「人間の女性になったら幸せになれるだろうか」との問いに対して答えた人物“one who had not been happy” (29)であろう—の家や自身の先祖の墓を訪れる。彼は、見覚えのある元恋人だと思われる女性の後を追って彼女の部屋へ入ると、不思議なことにそこは教会になっており、ベッドに横たわった彼女の所へ行く。ベッドは“a tomb” (151)であり、彼女の身体が冷たい大理石に変わっていたのは、彼女が既に亡くなっていることを示唆するだろう。しかし、触れるのを禁じられた the White Lady とは対照的に、彼は彼女の顔やむき出しになっている手や足に触れている(151)。その後彼は、先祖の墓を訪れる。明示されないが、そこで彼が感じた温かいキスや、力強いが優しく彼の手を握る手は彼の母と父ではないかと推測される(151)。本節の第1部で述べた彼の先祖との隔たりに加え、現実世界の人々との関わりの無さは彼が

「誕生前の墓」に留まり不活発な生を生きる要因の1つであるが、彼は the Wise Woman のお陰で彼らの存在に向き合う事ができた。自殺願望の様なものを作品中で何度も露わにしていた Anodos は、今や死への恐れを抱くが(151-52)、これは彼が「生きたい」と思う様になったこと―「誕生前の墓」から出始めている―表れとも言えるだろう。戻って来た Anodos に、the Wise Woman は、私達は喜び・悲しみの両方に泣くが涙に変わりはなく、憧れ・安堵の両方に溜息をするが溜息の名は同じであることに触れ、喜びと悲しみに満ちたこの世の生について歌う。そして死は恐れるべきものではなく“the pangs of death are throbs of life”であり、死して起きると墓は無く、“... the dead ones smile above, / With hovering arms of sleepless love” (152)と歌い、彼を慰める。

それまで単調な・停滞した生を生きていた Anodos は the Wise Woman のお陰で「誕生前の墓」から解放され、やるべき仕事―兄弟の王子達との巨人退治や、聖なる儀式を装った人身御供の悪を暴くこと―をなす。儀式での彼の向こう見ずな行動は自殺願望の表れと見られうるが、彼は“enjoying, perhaps, something of an evil satisfaction, in the revenge I was taking upon the self which had fooled me so long” (187)と考えている。彼を第8章以降苛んでいた彼の「影」と同様に、儀式で人々を貪っていた狼の様な怪物は彼の悪い・低次の自己だと考えられ、それを倒そうとする Anodos の行動は、MacDonald が *Unspoken Sermons* (1867, 1885, 1889)の中の“Self-Denial”で論じた、人は向上するために自身の内にある低次の自己を何度も打ち壊さねばならないという考えに合致する。この考えは the Maiden に塔での幽閉状態から解放された直後の Anodos の言葉“Doubtless, this self must again die and be buried, and again, from its tomb, spring a winged child; ... Self will come to life even in the slaying of self; but there is ever something deeper and stronger than it, which will emerge at last from the unknown abyss of the soul” (176)にも見られる。人身御供の儀式は the Maiden に解放された後の出来事であるため、彼の行動は上に引用した言葉の反映だと受け取られる。よって、それは the Wise Woman に会う前に散見された彼の自殺願望とは一線を画し、低次の自己を凌駕し常に向上すべきだという作者の理想的かつ積極的な生への態度だと解釈される。その儀式で「死」を迎え

魂の状態になっていた彼は、期せずして再び人間世界に「産まれ」ることとなる。彼の感じた激しい痛みは身体を強く感じさせるものである(192)。Anodos は、the Beech に幸せになれるとはっきり答えられなかった、悲しみと喜びに満ちたこの世について恐れと不安を抱く(194)。しかしながら、彼は、何か悲しみや行き詰まりに気圧されそうになった時は、the Wise Woman の小屋から束の間出ているだけの様になっている。加えて、彼の先祖の墓に彼女の小屋の入り口のマークが有る事から、彼は“I shall find it one day, and be glad.”(195)と考える。現実世界に繋がる 3 番目の扉から帰って来た Anodos に the Wise Woman が歌い掛けた歌に明白な様に、彼女は Anodos に生と死の両方に慰めをもたらし、彼が懸命に生きる縁となる存在なのである。

III: The Wise Woman と女性達—女性像と生命観の読み直し

i) 女性と想像力—歌、自然を思わせる声、そして生命観

想像力を神の創造に準ずる働きとして見做す MacDonald にとって詩(歌)は神の創造物を最も近接的に表現したり、本質を表したりする上で人が用いる最良の言葉であることは序論で述べた通りであり、想像力の世界とされる Fairy Land を舞台とした *Phantastes* の考察に欠かせない要素である。セイレーンやウンディーネ、メリュジーヌといった「水の女」を広範囲に渡って考察した小黒康正氏によると、歌による誘惑は聴覚重視(甘美な声、音楽性)、知性重視(知識を授ける、全知性)、或いはその両方を持つものに分けられる(9-19)。本節でも、「歌う女性」達の声そのものと歌の内容の両方に耳を傾けるが、前節で考察した the Wise Woman の歌に明らかである様に、彼女達は歌うファム・ファタルではない。彼女達の歌は男性を誘惑して破滅をもたらす「死の声」ではなく、「生」をもたらし解放させる甘美なものである。

従来、*Phantastes* は Anodos の想像力・歌に注目して、彼の詩人としての成長の物語として考察されて来たが、MacDonald が“The Imagination”で想像力を女性として捉えているのは見過ごせない事実であり、²⁷ 本作でも女性が想像力を体現する存在として描かれる。これは拙論でも論じたことではあるが、²⁸ 特に注目すべきは、Anodos に Fairy Land の道を示した彼の妖精の祖母が彼の母方の祖先であり、彼は彼女から妖精の血を受け継いでいたらしいこと、

29 彼が Fairy Land へ行く前に彼にその存在について最初に触れたのが妹であったこと(5)、彼が Fairy Land で最初に出会ったのが彼と同じく妖精の血を引く母娘であったこと(9-22)、そして 2 つ目の小屋に住む 4 人家族の描写で明確に男性(父息子)/女性(母娘)=現実・理性/Fairy Land・想像力というジェンダー的な二分がされていること(49-56)であろう。³⁰ そして女性と想像力の密接な繋がりを表す最たるものが、従来の研究では主體的に考察されて来なかった「歌う女性」なのである。

「歌う女性」を考察する上では、まずは聴覚的なもの、すなわち彼女達の声の音楽性や、それが自然を思わせるものであることに注意を払う必要が有る。The Beech の声は、Anodos に“the sound of a gentle wind amidst the leaves of a great tree” (28)を思い起こさせるものであり、“like a solution of all musical sounds” (29)と表現される。The Maiden の歌声は、“Like a living soul, like an incarnation of Nature, ... It bathed me [Anodos] like a sea; inwrapt me like an odorous vapour; entered my soul like a long draught of clear spring-water; shone upon me like essential sunlight” (173)という風に自然とその癒しの力に密接に結び付けられる。The Wise Woman の声は、年老いた見た目からは想像も付かない“the sweetest voice I had ever heard,” “such melody” (138)であり、結末部では、葉擦れの音が“sweet inarticulate music”を作り、それが段々言葉となり、“A great good is coming—is coming—is coming to thee, Anodos.” (195)と彼に語り掛けたのであった。この様に、彼女達の声は全て自然を彷彿とさせると共に音楽性を持つものである。MacDonald が *Phantastes* を“fairy tale”と呼んでいたのは先に述べたが、彼が評論“The Fantastic Imagination”の中で“The true fairytale is, to my mind, very like the sonata” (326), “Nature is mood-engendering, thought-provoking: such ought the sonata, such ought the fairytale to be.” (328)と述べ、真のフェアリーテイルの持つ自然を思わせる特徴や音楽性に触れている事は注目に値しよう。更には、自身の作品を“broken music” (329)と表現しており、彼が理性性ではなく、感情・感覚に訴えかける音楽性を重視していたことが窺われる。よって、“fairy tale”である本作において、女性達の自然を思わせ、音楽性を持つ声に耳を傾ける必要性は明白であると言えるだろう。

では、これまで見過ごされて来た the Wise Woman と他の女性達との連関に

ついて考察して行く前に、まずは彼女以外の女性達の歌の内容についても述べることで「女性と歌」のテーマを深めたい。最初に the Beech について述べる。彼女もまた「歌う女性」であり、Anodos と最初に出会った時と別れる時に、“I may love him, I may love him; for he is a man, and I am only a beech-tree.” (28, 31)と繰り返し歌う様に述べている上、彼に複数の歌を歌い掛けている。彼が唯一言語化した歌で、彼女は“I saw thee ne’er before; / I see thee never more; / But love, and help, and pain, beautiful one, / Have made thee mine, till all my years are done.” (30)と歌う。Gaarden は“The renunciation of the Beech-Woman, who goes on loving but doesn’t cling to her beloved, parallels and foreshadows the renunciation of his beloved white lady that Anodos will have to make later in the story” (*The Christian Goddess* 29)と述べ、the Beech の愛の形と Anodos が Fairy Land での疑似的な死の状態に到達した愛の境地“love that healeth” (192)との類似を指摘する。加えて、“till all my years are done”は、彼女の「木」としての生命を表し、彼女の途方も無く長い生命が尽きるまで彼を思う気持ち—愛されることではなく愛することにより人は他者に近付けると悟った Anodos の考え(191)に通じる—や、その後人間の女性として生まれたいという彼女の生命への強い憧れを読み取るのも可能であろう。

また、Anoods は the Beech の歌を“a strange sweet song, which I could not understand, but which left in me a feeling like this”とって言語化し、それについて“I cannot put more of it into words” (30)と述べており、彼女の歌が通常の言語を超えたものであることが示唆される。エクリチュールフェミニンを提唱した Cixous や Julia Kristeva、Luce Irigaray は、既存の家父長的言語に対抗する「女性の言葉」を模索していたが、本作の女性達が扱う、言語化するのが困難であり、意味ではなく感覚・印象(feeling)を聞くものに残す自然を思わせる言葉や声は、Cixous らが提唱するエクリチュールフェミニンに通じると言えるだろう。³¹ 更に、MacDonald 作品では、深遠な知恵、特に死と生に関わる神秘は通常の言語を超えたものとしてしばしば表現される。その最たるものは *At the Back of the North Wind* で Diamond が言語化しようとして何度も試みていた川の歌や *Lilith* で Lilith が自身の出自や身体について述べた通常の言語にできない本(144-47)であろう。これらは死と生の神秘に関わるものであった。

³² 同様に、the Beech の歌った歌は“*It told me the secret of the woods, and the flowers, and the birds.*” (30)であり、彼女の歌を聴きながら、Anodos は四季の巡りを感じながら、子供時代から今までの人生を歩み直す様な感覚に浸っている(30)。本作では第 12 章に明らかである様に、四季と生死が結び付けられているため、the Beech は自然を思わせ、音楽性を持つ声で言語化出来ない歌を歌うことによって、彼に自然や生命の神秘を歌い掛けたと考えられる。

次に、the Maiden を「歌う女性」として考察する。第 I 節で述べた様に、Anodos に珠を割られて成長した彼女は、今まで珠に頼っていた光と歌(音楽)を自ら発せられる様になる(174-75)。彼女は“*sunset*”や“*radiance*”と表現され、太陽の光の当たらない場所に太陽をもたらして人々を救い出す存在だと言われる(175)。MacDonald は、知性と想像力について“*The region belonging to the pure intellect is straitened: the imagination labours to extend its territories, to give it room. She sweeps across the borders, searching out new lands into which she may guide her plodding brother. The imagination is the light which redeems from the darkness for the eyes of the understanding.*” (“*The Imagination*” 315)と述べる。³³ 想像力が光や導き手として表現されており、正に、光と表現されると共に歌によって人を救い導く the Maiden を指す様である。

Anodos と the White Lady、the Maiden と Anodos の関係性は、「墓」と見做せる場所からそこに閉じ込められた者を歌によって「生まれ出させた」という点で類似するが、その姿勢は実に対照的である。Anodos が the White Lady を解放したエピソードは実は利己的な欲望によるものであり、“*Anodos’ desire, the male desire, is to free the female in order to reconfine her to his wishes*” (McGillis “*Phantastes and Lilith*” 42)であるのに対し、the Maiden の歌は、Anodos を彼のダブルであり“*lower self*”だと見做される「影」と共に塔の中に閉じ込められた状態から解放させ、或る意味誕生・新生させ、そのまま彼を残して他の人々を解放するために立ち去る。彼女はセイレーンに代表される典型的な歌うファム・ファタル像に当てはまらない上、単に彼の成長の指標として副次的に見做されることはできない—彼女は彼を解放すると共に、彼が到達すべき境地を示す存在なのである。McGillis は彼女について“*Her suffering has ‘uplifted’ her into the realm of joy, and she has become a complete poet singing songs which*

“do good, and deliver people” (“*Phantastes and Lilith*”43)と見做すと共に、Hélène Cixous が提示した女性詩人の姿に通じるものを見出す。Cixous は、“the masculine-conjugal subjective economy” (259)の中で女性達は二重に抵抗し、統一は失わないまでも自身の一部を失わねばならないが、それと同時に、女性は男性よりも遥かに生きることやエゴの統制などについて知っているので、密かに・静かに・内側深くで成長し増加する(“grows and multiplies”)と述べ、その理由として“Unlike man, who holds so dearly to his title and titles, his pouches of value, his cap, crown, and everything connected with his head, woman couldn’t care less about the fear of decapitation (or castration), adventuring, without the masculine temerity, into anonymity, which she can merge with, without annihilating herself: *because she’s a giver.*” (259, 強調引用者)と指摘する。これは、煌びやかな鎧を付け自身を Sir Galahad になぞらえ虚栄心に浸っていた Anodos とは対照的に、大切にしていた珠を彼に壊されたもののそれをもはや必要とせず、珠が発していた美しい音と音楽を自身に統合した the Maiden の姿に彷彿するであろう。彼は彼女に救い出された後に鎧を脱ぎ捨てて“I am what I am, nothing more.” (176)と悟る。彼女は自分の中に統合した光と歌を自身の中に留めるのではなく、それを人々に与え、善行を施すのだ。そして彼女は“Now I go about everywhere through Fairy Land, singing till my heart is like to break, just like my globe, for very joy at my own songs. And wherever I go, my songs do good, and deliver people.” (174-75)と Anodos に語り、彼女の訪れを待つ多くの人々の許へ行くためにすぐに立ち去る。The Maiden は彼が学ばねばならない愛の境地“a well of love” (150)や死後到達した“the love that healeth” (192)を体現しており、歌うことで人々に「与える」存在なのである。

それでは、彼女の歌の内容に耳を傾けて行こう。1 番目の歌は母なる大地についての歌である。Anodos は、死んで母なる大地と合一したいという欲動を作品中で何度も露わにし、疑似的な死の後に彼は“Now that I lay in her bosom, the whole earth, and each of her many births, was as a body to me, at my will. I seemed to feel the great heart of the mother beating into mine, and feeding me with her own life, her own essential being and nature.” (190)という風に束の間その願いを成就させる。それに対して the Maiden は、死後のことではなく、子供達を慈しむ

母の様子を歌い、悲しみに打ちひしがれた時は母なる大地の許へ行き泣く様に言い、“At least she will press thee to her knee, / And tell a low, sweet tale to thee, / Till the hue to thy cheek and the light to thine eye, / Strength to thy limbs, and courage high / To thy fainting heart, return amain, / And away to work thou goest again.” (174)と、辛い時には再び懸命に生きる勇気を母なる大地が与えてくれ、積極的な生へ向かえることを歌い上げる。この歌で彼女は Anodos を塔から「産まれ出さ」せており、これは彼が死の眠りを眠る the White Lady を歌により呼び起こして「誕生日の墓」から解放したエピソードを再現していると言える。2 番目の歌は、人はそれぞれ進む道は違うが、最後帰る場所は同じ 1 つの“home” (175)であると歌い、生を全うする大切さを述べている。この歌の後半を、*Lilith* で全ての母 Eve が歌っており(228)、不思議なことに Vane は“... I thought I had heard the song before” (228)と述べている。最晩年の作で再び the Maiden の歌が取り上げられたのは、*Phantastes* における彼女の重要性や、この歌が MacDonald の死生観の中核を表すものだと示すだろう。

ii) 「歌う女性」 the Wise Woman と女性達の共鳴

では、本稿で最も重要な「歌う女性」である the Wise Woman について再び、今度は他の女性登場人物との関連に着目し、彼女達の響き合う様子を考察することで作品の生命観と女性像の両方に新たな響きを加える。特に、the Wise Woman が Anodos に the White Lady の本当の姿を見せて受け入れさせた後、彼女が身体化した存在となったことを詳しく論ずる。女性達の関係を読み解くことで、*Phantastes* で見過ごされて来た身体を具えたこの世の生への考えを補強し、女性同士の関係や身体性、主体的な女性像を浮き彫りにして行く。

まず、the Wise Woman と the Beech との関連について簡潔に述べる。作品の結末部で、自分の領地にある大きな古いブナの木の下で寝そべっていた Anodos は、the Wise Woman の声が聴こえて目を開け、“her face, with its many wrinkles and its young eyes, looking at me from between two hoary branches of the beech overhead” (195)を認めるのであった。Fairy Land の花の妖精は、妖精が魂、花が身体のような役割をしていたので、もしこの木が彼がそこで出会った the Beech であったなら、彼女は the Wise Woman と一緒になることで或る意味「身体」化した存在として人間世界で顕現し、「人間の女性」になりたいと

いう夢を一部叶えたと言えそうだ。

次に、the Maiden との関わりに議論を移そう。Anodos は、他の人々を救い出しに行った彼女を見送った際に、“She went like a radiance through the dark wood, which was henceforth bright to me, from simply knowing that such a creature was in it. She was bearing the sun to the unsunned spots.” (175)と考える。暗い森は、時に陰鬱なことの起こるこの世のメタファーであり、そこに光をもたらす the Maiden の存在が有るのを知っていることが彼に慰めを与えている。前節で、Anodos は生きている間も死後も the Wise Woman に会えるので、彼女は彼が時に悲しみに打ちひしがれても生を全うする・積極的に生きることを可能にする存在であると述べたが、それと同様の特徴が the Maiden に見受けられるのである。更に注目すべきことに、the Maiden の歌った2つの歌に登場する“the mother Earth”と“home”は、the Wise Woman に類似している。The Maiden の1番目の歌にて母なる大地が、彼女の子供達が悲しみに打ちひしがれた時でも、心身共に再び力一杯になって生に向かえる様に彼らを膝に抱き寄せて“a low, sweet tale” (174)を語った様に、the Wise Woman は Anodos に歌を歌って慰めや教訓を与え、彼に生きる力をもたらしていた。2番目の歌では、災い(wrong)が多ければ“its curing song” (175)も多いと述べられていたが、これは Anodos の悲しみを癒やす歌を歌った the Wise Woman の姿を彷彿する。そして、“home”は人々が最後辿り着く場所であるため、彼が死後も会えるという the Wise Womanに通じると言えよう。生命を歌い上げた the Maiden の歌と the Wise Woman の存在が響き合い、本作の生命観を際立たせる。

では、最後に the Wise Woman と the White Lady との関わりについて述べる。The Wise Woman は彼女の小屋の2つ目の扉から Anodos を送り出すことで、彼の理想化した女性像でありずっとセクシュアル且つ自己中心的な所有欲を持って追い求めていた the White Lady が、実は Sir Percivale を彷彿とする錆びた鎧の騎士の妻であり、生身の女性だと悟らせる。その後彼女は騎士と手を取り合って、通り過ぎ様に彼の方を見ながら寝室へと向かう。耐えられず the Wise Woman の小屋へ戻りたいと願った Anodos は、正に the White Lady の身体性を思わせる寝室に小屋の入り口のマークを発見するのであった。*Phantastes* の物語世界を「夢」だと見做す Wolff は、フロイトの精神分析的な手

法を用い、“we shall realize that the knight is the father, ‘the better man,’ and that the white lady was all along forbidden to Anodos-Oedipus” (98)と解釈する。Wolff と同様に精神分析的手法を用い、特に「女性と死」の問題を考察する David Holbrook もまた、騎士を Anodos の父、the White Lady を母と捉える。Anodos が夫である騎士を「太陽」、自身を「月」と見做す彼女の言葉を甘受して述べた“Let me, then, be the moon of thy night still, O woman! And when thy day is beclouded, as the fairest days will be, let some song of mine comfort thee,” (149)を、Holbrook は“*This cry of Oedipal jealousy is virtually a direct expression of the infant MacDonald’s claim on the dead mother.*” (228)と解釈して作者の母への思慕の念を過度に読み取る。しかしながら、この場面で the White Lady をエディプスコンプレックスの欲望の対象としての母と見做すのは不適當であろう。Anodos は、最初に彼女の姿を見た時、“The lady wonderfully resembled my marble lady, but was *altogether of the daughters of men*, and I could not tell whether or not it was she.” (147, 強調引用者)と述べており、Pygmalion を彷彿とする芸術家の理想の投影された「大理石」の女性ではない、身体を具えた普通の人間の娘としての彼女の姿を強調する。McGillis は、Anodos は“can only conceive of woman as dominated or dominating” (“*Phantastes and Lilith*”43)であり、彼は“must learn to value earthly woman for what she is” (42)と指摘する。それまでは“the white lady”や“the marble lady [woman]”として身体性を奪われ、時折 Anodos の所有欲を如実に表すように“my”が付けられてただの客体とされていた the White Lady だが、the Wise Woman の助力により、Anodos は彼女を「身体を持った女性」として受け入れて価値を認められる(value)様になったのである。

聖なる儀式を装った邪悪な人身供犠の正体を暴く過程で、Anodos が狼の様な怪物と相打ちにあって亡くなった後、第 24 章で彼の葬儀に夫である騎士と共に the White Lady が再度現れる。彼女は“the lady I [Anodos] loved” (189)と言及され、理想的美ではあるが無機質な生(「死」すらも)彷彿とする「白」や「大理石」とはもはや結び付けられず、身体を持った人間の女性となっている。棺に横たえられた Anodos の姿を見た the White Lady は“He has died well” (189)と述べ、彼女が流した涙が彼の顔にかかる。身体に触れることを何度も禁じられていた彼女との間での、或る意味で初めての彼女からの身体的触れ

合いだと言えよう。そして、彼女は the Wise Woman や the Maiden の様に歌いはしないが、Anodos が彼女の身体を顕現化した歌の中で彼女の口は“... the tender portal / Of the home of melody” (121)と表現されており、上記の“He has died well”という言葉は Anodos の魂を満たす(“My spirit rejoiced” (189))彼への一種の鎮魂歌となっている。

魂の状態になりもはや言葉を発せない Anodos は“I could manifest myself in the primrose; that it said a part of what I wanted to say; just as in the old time, I had used to betake myself to a song for the same end” (191)と考えて—彼は以前花の妖精について“For just what the flower says to you, would the face and form of the fairy say” (16)と観察していた—花の中に入り、the White Lady に自身の思いを表現する。それを見た彼女は“Oh, you beautiful creature!” (191)と言ってサクラソウを手折ってそれにキスをし、その後花が枯れたので Anodos はそこを去るのであった(191)。彼は花の妖精とそれが住まう花について“The flowers seem a sort of houses for them, or outer bodies, which they can put on or off when they please ... Whether all the flowers have fairies, I cannot determine, any more than I can be sure whether all men and women have souls” (16)と述べており、花と身体、妖精と魂が結び付けられている。Anodos は妖精ではないが魂だけの状態であるため、彼の入った花もまた身体の変換だと思ふべきだろう。これまで身体性がなく「死」と結び付けられていた the White Lady が、身体の変換である花の美しさに言及し、その身体を以て触れて手折ったことは、人の身体を具えた生の美しさと儚さを示すと共に、彼女の身体化や生命観の重要性を強調する。この場面で更に特筆すべきは、Anodos に歌われるだけの存在であった the White Lady が或る意味彼に歌い掛けている—彼女の言葉が彼の魂を鎮める一種の「鎮魂歌」となっている—こと、そして身体に触れるのを禁じ、それにも拘わらず触れられていた彼女が「触れる」側になっていることである。彼らの立場が最後逆転しているのは、Anodos の副次的存在として従来見られて来た本作の女性像の主體的な側面の表れとして注目すべきであろう。無機質な大理石であり、触れられるのを拒む聖なる存在であった the White Lady は、the Wise Woman の助力により生／性を具えた身体有る存在となったのだ。

結論

本稿では、従来 Anodos の成長の促進者・指標として副次的に見られて来た女性達を主体的に考察し、軽視されて来た女性の身体性や女性同士の関係、生命観を明らかにするために、産まれていない／真の意味で生きていない＝死の様な停滞した状態を指す“antenatal tomb”(37)と「歌う女性」に着目した。まず、第 I 節では「誕生前の墓」に留まっている女性達を、Anodos がいかに解放するか考察し、第 II 節では彼自身が「誕生前の墓」に居て停滞した・未熟な生を生きていることを概観した上で、「歌う女性」the Wise Woman によりそこから出て生に向かう過程を述べた。更には第 III 節にて、女性と想像力・歌(詩)の密接な結び付きに触れた上で、女性達の歌に耳を傾けると共に、作品上ははっきり表れることは無い the Wise Woman と女性達の連関を浮き彫りにした。女性達は作品の中で直接会うことは無いけれども、響き合う音楽の様に相互に関連しているのだ。そして、彼女達の歌に耳を傾けた時、私達は本作の底流に隠された身体や生のテーマを感じ取ることができるのである。

註

1 注釈者の Nick Page は“One day for each year of his life. Anodos’s story in Fairy Land is linked, therefore, to the story of his own life.” (271)と指摘しており、これは先行研究が *Phantastes* を Bildungsroman と見做す要因の 1 つでもある。

2 Anodos が第 5 章で洞窟の中にある雪花石膏に閉じ込められているのを発見し、歌によってそこから解放した女性は、作品中で“the [my] white lady”や“the [my] marble lady [woman]”と呼ばれている。先行研究でも彼女をどうに呼ぶのか表記の統一がなされていないが、本稿では彼女のことを便宜上“the White Lady”と言及する。

3 特に Hein, Sigman の論を参照。

4 *Phantastes* 出版直後に MacDonald の父と弟の John Hill が亡くなったことは先行研究でもよく言及されるが、本作出版前後に MacDonald 夫妻には複数の子供が産まれていることはやや見過ごされている様に思われる。1856 年には 4 人目の子であり、後に作者の伝記 *George MacDonald and His Wife* を著すこととなる長男 Greville、1857 年には

四女 Irene、本出版年である 1858 年には五女 Winifred Louisa、1860 年には次男 Ronald が誕生している。この様に、MacDonald が *Phantastes* を出版した年の前後ほど、彼に死と誕生が同時に降りかかった時期は他には無いため、「死」だけでなく「生命(誕生)」についても考察することは本作のより深い理解に繋がると考えられる。

5 Shelley は、“The Sensitive Plant”の第 2 部にて蝶がその中で誕生を待つ蛹を「誕生前の墓」として—“And many an antenatal tomb, / Where butterflies dream of the life to come, / She left clinging round the smooth and dark / Edge of the odorous cedar bark.” (24, 強調引用者)—表現している。ここで「誕生前の墓」とされる蝶の蛹を香しい糸杉の樹皮の滑らかで暗い端にしがみつかせた女性“*She*”は、この心地よい場所を統べる一つの力とされる“An Eve in this Eden; a ruling Grace” (20)である。この女性が亡くなった際に花や植物が嘆き悲しむ様子は、MacDonald が第 3 章で雪割草の死や Anodos が見た花の妖精達によるサクラソウの葬儀を描くのに少なからず影響を与えたと思われる。他にも、オジギソウのひたすら愛するという態度(“It loves, even like Love, its deep heart is full” (16))と Anodos が死後到達した愛の境地の類似や、四季と生のサイクルの結び付けが両作品に見られる(“The Sensitive Plant”の第 3 部、*Phantastes* の第 12 章)ことから、“The Sensitive Plant”の本作に与えた影響は見逃すべきではなく、“antenatal tomb”に注目する意義があると考えられる。

6 誕生前、或いは墓に在るとして真の意味で生きていない・死の様な停滞した生を生きている状態を表す“antenatal tomb”に留められた状態のことを、以降は基本的に「誕生前の墓」と日本語表記する。

7 Anodos は、the White Lady のことを“the marble beauty who sprang from her tomb or her cradle at the call of my songs” (115)と表現し、Fairy Palace で彼女の姿を顕現化しようとする際に、“Then surely if my songs sufficed to give her life before, when she lay in the bonds of alabaster, much more would they be sufficient then to give her volition and motion” (115)と考えている。彼の the White Lady を死／誕生前の状態から解放し、自身が彼女に生命を与えた、という自負が垣間見えよう。彼のこの考えは彼女へのセクシュアルな欲望を伴う所有欲へと繋がり、それを放棄し精神的な成長を遂げ真の詩人に成長できるかが、従来繰り返し着目されて来たテーマの 1 つである。

8 Fairy Land が我々の生きる現実世界よりも高次の想像力の世界であることは、本作の巻頭に Novalis (1772-1801) の *Shriften* における詩作・想像力についての文の引用や、

擬人化された想像力“Phantastes”が登場する Edmund Spenser (1522?-1599)の *The Fairie Queene* (1590; 1596)から影響を受けた Pheneas Fletcher (1582-1650)の *The Purple Island; or, The Isle of Man* (1633)—これは人の精神や身体についてのアレゴリカルな詩である—の引用(“Phantastes from ‘their font’ all shapes deriving, / In new habiliments can quickly dight.” (xlirii))が付されていることから明らかである。研究者達の見解も、Anodos が成長を遂げる Fairy Land は想像力の世界であるとして概ね一致しており、例えば McGillis は“Anodos’s journey takes him into the realm of the imagination in all its enticing and alluring forms. Although MacDonald values the imagination, he also follows Shelley in stressing the dangers inherent in the pursuit of the image for its own sake.” (“*Phantastes and Lilith*” 39)という風に本作で Anodos が経験する想像力の魅力と危険性について指摘する。

9 *Phantastes* の中で登場人物達が歌う歌は全て韻文であるため、MacDonald が評論で論じた、「全ての言葉の最初」のものであり、神の創造に準ずる人間の働きである「想像力」により産み出された“poetry”だと見做す。よって、以後本稿で「歌」と言及するものは全てこの“poetry”である。

10 以後、第 19 章に登場する小屋に住む若い目の老賢女のことは便宜上“the Wise Woman”と言及する。

11 以後、Anodos が第 4 章で出会ったブナの木的女性のことは“the Beech”、第 9 章と 22 章に登場する美しい音と光を発する不思議な珠を持った乙女のことは“the Maiden”と便宜上呼ぶこととする。

12 McGillis は“The male Ash clearly represents the grasping desire to possess, the will to power associated with a sexuality based on violence, represented by the Alder-maiden.” (“*Phantastes and Lilith*” 41)と指摘する。

13 David Holbrook は the Beech の“low, musical murmuring voice”を MacDonald 作品にしばしば表れる“the presence of the mother to her infant”だと見做し、the Ash については“the threatened father, who threatens Oedipal retaliation, for the son’s guilty love for the mother”(187)と捉え、エディプスコンプレックスの要素を the Beech が the Ash から Anodos を救う場面にも読み取っている。McGillis は、the Beech を当時の理想的な女性像「家庭の天使」を思わせる“the male ideal of woman as self-sacrificing nurturer”(“*Phantastes and Lilith*” 41)と捉える。Wolff もまた the Beech を母と看做して、the Ash から守るために与えた彼女の髪を“an element of maternal love and protection”と捉

え、更には彼女の髪を “the ‘golden brown’ lock of MacDonald’s mother’s own hair that he kept in the secret compartment with her letter about weaning him” (54)と結び付けて作者の母への思慕の念を強調する。MacDonald がキャビネットに生涯大切にしまっていたという母の髪については Greville MacDonald 33 を参照。

14 彼女の問いを受けて 21 歳だと答えた Anodos に対し、彼女は “Why, you baby!” (29) と言ってキスをする。人と木の年月の感覚の違いや、彼女が人間の年齢にすると数百年は生きているであろうことが示唆される言葉である。

15 身体有る女性として描かれた自然で最も重要なのは、*At the Back of the North Wind* (1871)に登場する不思議な力を持つ North Wind である。通常目に見えず触ることができない「風」を身体を具えた美しい女性にすることで、MacDonald は意識的にせよ無意識的にせよ、女性身体の表現における困難・不可能性の問題にも取り組んでいると考えられる。よって、North Wind の先駆け的な存在である the Beech は、本作の女性像の理解に欠かせない存在だと言えよう。North Wind の身体性については、Kumabe 14-83 にて詳しく論じている。

16 North Wind が与えた夢の中で Diamond が出会った天使達が、人間世界に生まれる前の姿だとする根拠としては、彼らが Diamond を “a lost playmate” (206) の様に扱ったことや、自分の気に入る星を掘り出した穴から飛び込んだ或る天使を案じる Diamond に対して、天使達を束ねる “the captain” が “He’s lost them [wings] by this time. They all do that go that way. You haven’t got any, you see.” (207) と述べていることから、天使達は人間世界に生まれる前の状態であるのが窺い知れる。星を掘った穴から出て行くことは、人間世界への「誕生」のメタファーなのである。

17 Ruskin は、彼の著作 *Sesame and Lilies* (1865)からも分かる通り大変因習的なジェンダー観を持っていた。そのため “the tinge of eroticism he found in MacDonald’s story for young children” (Raeper 222) を好まず、MacDonald に宛てた手紙の中で “The Light Princess” は “too amorous” であり、姫と王子の水浴や愛の場面は多くの子供達にとって大変有害であるので削除すべきと書いている。Ruskin と MacDonald の関係性や彼らの異なるジェンダー観については、Raeper 214-23 を参照。

18 MacDonald 作品における「成長を止められた少女」は、例えば “The Light Princess” (1864)のお姫様、“The Carasoy” (1867)の Fairy、“The Golden Key” (1867)の Tangle、“The History of Photogen and Nycteris” (1879)の Nycteris、そして *Lilith* (1895)の Lona が挙げら

れる。*Lilith* 以外の作品では、少女と少年が対になっており(順に、対となる存在としての少年達は、王子、Colin、Mossy、Photogen である)、少女のより困難な成長が強調されている。

19 “The History of Photogen and Nycteris”の Nycteris が、本稿における「誕生前の墓」に留まった様な状態から自ら脱する過程を考察して死生観と女性像を読み直した議論については、拙論「無垢な目を持つ少女の記す昼と夜、そして the blind mother の存在」を参照。

20 この議論については拙論「珠を持った乙女の成長」の pp. 50-51, 60 を参照。

21 MacDonald は、作者の表したいものが明示された、意味が一對一対応であるアレゴリーに対して概して否定的な立場を取っており、“The Fantastic Imagination”にて“A genuine work of art must mean many things; the truer its art, the more things it will mean.” (326) と述べている。また、彼は *Phantastes* を“a kind of fairy tale” (Sadler 102) と見做しているが、“A fairytale is not an allegory ... The true fairytale is, to my mind, very like the sonata.” (“The Fantastic Imagination” 326) と表現していたことから、私達は本作をアレゴリー的に読むのではなく、多様な解釈を産む音楽性に耳を傾ける必要が有るだろう。

22 Ovid (43 b.c.-?a.d.17)の *Metamorphoses* (1-8 a.d.)において、Pygmalion は自身が作った象牙の女性の像に恋をし、それを憐れんだ女神 Aphrodite がその像に命を吹き込んだ。Anodos の the White Lady への思いが Pygmalion の自作の彫像への愛と類似していることを洞窟内の“bas-relief”は指し示していると言えるだろう。

23 従来 Anodos の詩人としての成長の物語として考察される傾向にあるため、優れた吟遊詩人であった Orpheus への言及は、芸術家 Pygmalion との結び付けと共に、詩人 Anodos と彼の想像力により産み出された芸術作品・彼の理想 the White Lady という図式で読まれる一因となる。しかしながら、ギリシャ神話にも造詣の深かった MacDonald がここで Eurydice のことを想定していないとは考え難く、この場面における死と生の分かれ難い連関を表すものだと言える。Sigman もまた、Anodos にとっての the White Lady を“as well as Pygmalion’s statue, she is Eurydice” (31)だと述べている。

24 *Lilith* では、主人公の青年 Vane が、ユダヤ伝説で Adam の最初の妻とされる悪魔的な女性 Lilith が死んだ様な状態になっているのを発見した際に、洞窟内で彼女を介抱していた。ここには、血・羊水を思わせる、温かくて金属の様な味のする不思議な川が流れている。Lilith の回復の直接的な要因は Vane の血を飲んだことではあるものの、

彼女がそこで元の状態に戻ったことから、洞窟が生命を与える「子宮」として機能していることが分かる(100-08)。*Phantastes* と *Lilith* には洞窟やその中にある水や、男性が女性に生命を与えよう(死から生の状態に戻そう)とする、という共通点が見られるため、*Phantastes* における洞窟も「子宮」の象徴として考えられるだろう。Sigman も本稿と同様にこの洞窟を母体の象徴として見做して“The cave, the vegetation, the well, and the rather sexual description of the cave entrance all suggest the mother archetype.” (29-30)と指摘する。

25 MacDonald 作品において水と生命が密接な結び付きを持たされていることについては、“The Light Princess”の姫の生命と湖の水が密接に連関していることや、*The Princess and the Goblin* (1872)で Irene 姫が大祖母の部屋の底が見えない不思議な銀の浴槽での水浴が彼女に子宮の中に戻ったかのような安心感を与え、入浴後怪我がすっかり治った他新生のイメージに満ちていたこと、“The Golden Key” (1867)における Tangle と Mossy の新生を思わせる水浴シーンに見ることができる。*Phantastes* を Bildungsroman として Anodos の成長物語と見做し、4つの段階(turn)に分ける Gaarden は、それぞれの段階は“birth or rebirth imagery” (“George MacDonald’s *Phantastes*” 291)で示されており、“Each of these turns is introduced by water imagery: a torrential rain, a stream that grows into a river, the ocean.” (292)と述べて水と生命・成長の密接な結び付きを指摘している。

26 特に Michie 88-97 (Dead metaphor (cliché)), 97-102 (Synecdoche), 102-23 (Metatrophe)を参照。

27 MacDonald は“License is not what we claim when we assert the duty of the imagination to be that of following and finding out the work that God maketh. Her part is to understand God ere she attempts to utter man.” (“The Imagination” 314, 強調引用者)と述べ、想像力を女性として捉えている。

28 特に、拙論「珠を持った乙女の成長」54-57を参照。

29 妖精の祖母は Anodos に自身が彼の「母方の」祖先だと明確に言った訳ではないが、彼女の言葉“I dare say you know something of your great-grandfathers a good deal further back than that; but you know very little about your great-grandmothers on either side.” (5)に仄めかされていると言えるだろう。つまり、彼は21歳の誕生日に亡父の家督の正式な継承者となった彼は父方から財産を受け継ぐと共に、母方から妖精の血を受け継いでいたことを知ったと考えられる。Sigman も本稿の主張と同様の立場を取っており、Anodos の

相続した異なる種類の財産—父系からの土地やお金、母系からの妖精の血—に触れ、“One important thing he does not know about his great-grandmothers is that they came from Fairy Land ... Anodos takes an intense interest in this [matriarchal] inheritance, even though he does not yet know of its existence.” (24)と指摘している。更には、女性と Fairy Land の体現する想像力の結び付きの強さや、第7章で Anodos の出会う4人家族の描写におけるジェンダー的な二分(男性/女性=現実・理性/Fairy Land・想像力)により妖精の祖母が Anodos の母方の祖先であろうことが補強される。この議論については拙論「珠を持った乙女の成長」61を参照。

30 現実・理性/想像力=男性/女性というジェンダー的な図式は、*The Princess and the Goblin* にも明白に表されている。想像力を介した Irene 姫と大祖母の強固な疑似母娘関係が物語の鍵を握っており、上記の図式は Irene 姫の大祖母に関する話を鮎夫の少年 Curdie が全く信じず、姫を膝の上に乗せた大祖母の姿を前にしても彼女のことを見も聴きもできない場面(120-25)に如実に示される。

31 エクリチュールフェミニンについては、Jones の論を参照。

32 この議論については拙論 *Speaking the Unspoken Tales* の第1章(*At the Back of the North Wind*)と第4章(*Lilith*)を参照。Lilith が自身について語る言葉に関しては、表現が困難な(女性)身体の問題にも関連している。

33 この評論で想像力が女性として、知性が“her plodding brother”として表現されているのは、*Phantastes* の4人家族の描写に明らかであった「男性/女性=現実・知性/想像力」というジェンダー観の表れであり、女性と想像力(とそれにより産み出される詩・歌)の強い結び付きを示すだろう。

参考文献

Cixous, Hélène. “The Laugh of the Medusa.” *New French Feminisms*. Edited by Elaine Marks and Isabelle de Courtivron. Schocken Books, 1981, pp. 245-64.

Gaarden, Bonnie. *The Christian Goddess: Archetype and Theology in the Fantasies of George MacDonald*. Fairleigh Dickinson UP, 2011.

---. “George MacDonald’s *Phantastes*: The Spiral Journey to the Goddess.” *Crossing a Great Frontier: Essays on George MacDonald’s Phantastes*. Edited by John Pennington. Winged Lion, 2018, pp. 289-311.

- Hein, Rolland. *The Harmony Within: The Spiritual Vision of George MacDonald*. Cornerstone, 1999.
- Hirsh, Marianne. *The Mother/Daughter Plot: Narrative, Psychoanalysis, Feminism*. Indiana UP, 1989.
- Holbrook, David. *A Study of George MacDonald and the Image of Woman*. Edwin Mellen, 2000.
- Jones, Ann Rosalind. “Writing the Body: Toward an Understanding of l’Écriture féminine.” *The New Feminist Criticism*. Edited by Elaine Showalter. Virago, 1985, pp. 361-77.
- Kumabe, Ayumi. *Speaking the Unspoken Tales: The Image of Woman and the View of Life and Death in George MacDonald’s Works*. Ph. D. Thesis, Kyushu University, 2021.
- Knoepflmacher, U. C. *Ventures into Childland. Victorians, Fairy Tales, and Femininity*. The U of Chicago P, 1998.
- Lewis, C. S. *George MacDonald: An Anthology 365 Readings*. HarperOne, 1946.
- MacDonald, George. *The Princess and the Goblin and The Princess and Curdie*. 1872, 1883. Edited by Roderick McGillis. Oxford UP, 1990.
- . *The Complete Fairy Tales*. Edited by U. C. Knoepflmacher. Penguin, 1999.
- . *Unspoken Sermons: Series I, II, and III*. 1867, 1885, 1889, Nu Vision, 2009.
- . *At the Back of the North Wind*. 1871. Edited by Roderick McGillis and John Pennington. Broadview, 2011.
- . *Lilith*. 1895. Wm. B. Eerdmans, 2000.
- . *Phantastes*. 1858. Edited by Nick Page. Paternoster, 2008.
- . *Phantastes*. 1858. Edited by John Pennington and Roderick McGillis. Winged Lion, 2017.
- . “A Sketch of Individual Development.” *A Dish of Orts: Chiefly Papers on the Imagination, and on Shakespeare*. HardPress, 2010, pp. 24-39.
- . “The Imagination: Its Functions and Its Culture.” 1867. *Phantastes*. 1858. Edited by John Pennington and Roderick McGillis. Winged Lion, 2017, pp. 311-22.
- . “The Fantastic Imagination.” 1894. *Phantastes*. 1858. Edited by John Pennington and Roderick McGillis. Winged Lion, 2017, pp. 324-29.
- MacDonald, Greville. *George MacDonald and His Wife*. 1924. Johannesen, 2000.
- Manlove, C. N. *The Impulse of Fantasy Literature*. Kent UP, 1983.
- McGillis, Roderick. “*Phantastes* and *Lilith*: Femininity and Freedom.” *The Gold Thread: Essays*

- on *George MacDonald*. Edited by William Raeper. Edinburgh UP, 1990, pp. 31-55.
- . “The Community of the Centre: Structure and Theme in *Phantastes*.” *For the Childlike: George MacDonald’s Fantasies for Children*. Edited by Roderick McGillis. Scarecrow, 1992, pp. 51-74.
- Michie, Helena. *The Flesh Made Word: Female Figures and Women’s Bodies*. Oxford UP, 1987.
- Pennington, John, editor. *Crossing a Great Frontier: Essays on George MacDonald’s Phantastes*. Winged Lion, 2018.
- Sadler, Glenn Edward, editor. *An Expression of Character: The Letters of George MacDonald*. William B. Eerdmans, 1994.
- Shelley, Percy Bysshe. *The Sensitive Plant* (『対訳 めむりぐさ』). Translated by Suzuna Jimbo. Osaka Kyoiku Tosho, 2002.
- Sigman, Joseph. “Death’s Ecstasies: Transformation and Rebirth in George MacDonald’s *Phantastes*.” *Crossing a Great Frontier: Essays on George MacDonald’s Phantastes*. Edited by John Pennington. Winged Lion, 2018, pp. 23-52.
- Sutton, Max Keith. “The Psychology of the Self in MacDonald’s *Phantastes*.” *Crossing a Great Frontier: Essays on George MacDonald’s Phantastes*. Edited by John Pennington. Winged Lion, 2018, pp. 121-43.
- Tolkien, J. R. R. “On Fairy Stories.” 1964. *Tree and Leaf*. Harper, 2001, pp. 1-81.
- Walker, Barbara G. *The Woman’s Dictionary of Symbols and Sacred Objects*. HarperOne, 1988.
- Wolff, Robert Lee. *The Golden Key: A Study of the Fiction of George MacDonald*. Yale UP, 1961.
- 小黒康正『水の女—トボスへの船路』九州大学出版会, 2012.
- 隈部歩「珠を持った乙女の成長—George MacDonald の *Phantastes* における女性像と死生観—」『Tinker Bell 英語圏児童文学研究』英語圏児童文学会(旧: 日本イギリス児童文学会), No. 62, 2017, pp. 49-63.
- . 「無垢な目を持つ少女の記す昼と夜、そして the blind mother の存在 —George MacDonald の “The History of Photogen and Nycteris” における生と死—」『西南学院大学言語教育センター紀要』西南学院大学言語教育センター, 第 11 号, 2021, pp. 1-31.
- マクドナルド, ジョージ『ファンタステス』蜂谷昭雄訳, 筑摩書房, 1999.

Labeling in Edge*

Jun Kawamitsu

1. Introduction

Syntactic parameters vary from language to language. There are some asymmetries even in English. Quantifier Float (Q-float), for example, is the phenomenon in which we can find the parametric differences in that the occurrence of Floating Quantifier (FQ) is restricted in some varieties like standard English but relatively unrestricted in other varieties like West Ulster English (WUE).

- (1) a. What did he say all that he wanted to buy t?
b. What do you think (that) he'll say all (that) we should buy t?

(West Ulster English (WUE); McCloskey (2000: 62))

As observed by McCloskey (2000), FQ can strand in the intermediate Spec-CP position in WUE. On the other hand, FQ in standard English cannot strand in the edge of the intermediate CP. In previous studies, the example in (1) is often cited as evidence for successive-cyclic movement from the perspective of stranding analysis of Q-float (e.g., Sportiche (1989), Shlonsky (1991), Bošković (2004), among others). However, the parametric puzzle for why the distribution of FQs varies from language to language, for example, is not enough to be scrutinized. This paper tries to explain this puzzle theoretically in terms of the Labeling Algorithm (LA) proposed by Chomsky (2013). In the LA framework, a label of the set is not determined automatically but by a specific algorithm based on Minimal Search (MS). However, we cannot capture the parametric differences if all structures are labeled equally. Therefore, we suggest that the parametric behavior of Q-float comes from the different labeled structures; a label is detected as X in some environments on the one hand and

as XP on the other. Furthermore, we suggest that these labeling asymmetries are deduced from the two types of Transfer operations: Strong Transfer and Weak Transfer.

We begin by presenting asymmetries of Q-float in some English varieties in Section 2. Section 3 outlines the main theoretical background of this paper and proposes two types of Transfer operations. Section 4 suggests how our analysis captures the parametric distinctions of Q-float. The conclusion is given in Section 5.

2. (Im)possibility of stranding FQ in the edge¹

The previous section shows that FQ can strand in the intermediate CP position in WUE. Henry (2012) observes that some varieties of English have similarities to WUE in that they allow FQ to be floated in the intermediate edge of CP. This pattern is found in West Derry City English and East Derry English, and the latter example is the following:

- (2) a. Where did he think all that you went in Derry?
b. Who did he say all was elected in the council elections?

(East Derry English (EDE); Henry (2012: 31))

On the other hand, Henry also notes that some varieties indicate opposite results; FQ cannot float in the intermediate Spec-CP. This pattern is found in South Derry English and Strabane English.

- (3) * What did he say all that he did on holiday?

(South Derry English (SDE); Henry (2012: 28))

Furthermore, FQ-stranding is found not only in Spec-CP, as shown above, but also in Spec-vP. East Derry English and South Derry English allow FQ to strand in the Spec-vP position.

- (4) a. What did he all do on holiday?
b. What did he all say that he did on holiday?

(SDE; Henry (2012: 28))

Interestingly, while South Derry English does not allow FQ to be floated in the edge of CP, FQ-stranding in the edge of vP is acceptable. In addition, FQ cannot appear in the Spec-vP position in Strabane English.

- (5) a. * What did he all do in Derry?
b. * What did he all say that he did in Derry?

(Strabane English (StE); Henry (2012: 31))

The varieties overviewed in this section are summarized in the following table:

	EDE	SDE	StE
Stranding FQ in Spec-CP	✓	*	*
Stranding FQ in Spec-vP	✓	✓	*

Table 1: Asymmetries of Q-float

3. Theoretical Background

3.1. Labeling Algorithm

In the labeling theory proposed by Chomsky (2013), a set created by Merge should be labeled with a certain algorithm based on Minimal Search (MS) in order to be interpreted at the interfaces. There are three possible structures to be considered:

- (6) a. $\gamma = \{H, XP\}$
b. $\gamma = \{XP, YP\}$
c. $\gamma = \{H1, H2\}$

In (6a), LA detects the closest head, H, so this set is labeled as H. On the other hand, the set in (6b), the so-called XP-YP configuration, cannot be labeled since the LA cannot identify the closest head. Chomsky provides a two-way solution for this structure: (i) structure modification strategy and (ii) feature-sharing strategy. The former strategy results in the properly labeled structure when either XP or YP moves out of the $\{XP, YP\}$ set. For instance, the XP's movement renders γ identified as YP in (6b). In the feature-sharing strategy, if both XP and YP share prominent features in common (e.g., ϕ -feature and Q-feature), then they function as a label for γ . The detailed analyses for the third structure in (6c), which we call the Head-Head configuration, have not been presented thus far, but we suggest that the Head-Head configuration leads to a labeling failure.

3.2. Two Types of Transfer Operation

Since Chomsky (2000), it has been assumed that the Transfer operation, which sends syntactic structures to the interfaces cyclically by phase, makes its domain untouchable in narrow syntax. Given that CP and vP are phases, their complement is sent to the interfaces after Transfer.

- (7) a. [CP XP_i C [TP ... t_i ...]]
 b. [vP YP_i v [VP ... t_i ...]]

Shaded areas in (7) are the domain of Transfer, so elements within its domain cannot have access to further syntactic operations. Only the edge of the phase remains present in narrow syntax, and XP and YP in (7), for example, can participate in the next syntactic operations.

Generally, Transfer is supposed to send off all syntactic structures so that no elements within its domain exist in narrow syntax. We tentatively call this type Strong Transfer, which is scrutinized by Ott (2011), Narita (2011) and Epstein, Kitahara and Seely (2012). Obata (2017), on the other hand, argues that Transfer is weak enough to keep syntactic structures in narrow syntax.

- (8) [W]eak Transfer only makes certain domains inaccessible to operations in narrow syntax, and all the elements/features consisting of representations in narrow syntax are preserved as is after Transfer. (Obata (2017: 120))

She provides a problem of Strong Transfer and suggests that the example in (9) cannot be expected if Transfer is strong enough to erase all syntactic objects from narrow syntax, as shown in (10).

- (9) Whose claim that John bought the book did Mary believe?
 (10) a. [DP whose claim that [TP John bought the book]]
 b. Mary (did) believe [whose claim that [TP]]
 c. [DP whose claim that [TP]]; did Mary believe t_i

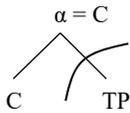
If TP, which is a complement of *that*, is strongly transferred, then the resulting output expects an incorrect one like **Whose claim that did Mary believe John bought the book?*. However, if the information of TP is preserved in narrow syntax due to Weak Transfer, as pointed out by Obata, then the sentence in (9) derives appropriately.

In this paper, we consider both Strong and Weak Transfer and suggest that these two options affect the way of labeling.

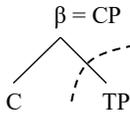
3.3. Labeling in Edge

We assume there are two options for Transfer: one is strong, and the other is weak. We propose that these two operations affect the way of labeling; while following Takita *et al.* (2016), Strong Transfer supplies the head status label for α (= (11a), (11c)), Weak Transfer makes β (= (11b), (11d)) be a phrase level, extending the insight of Obata (2017). In the following, a curved line denotes Strong Transfer and a curved dotted line Weak Transfer.

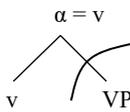
- (11) a. Labeling in CP with Strong Transfer



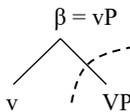
- b. Labeling in CP with Weak Transfer



- c. Labeling in vP with Strong Transfer



- d. Labeling in vP with Weak Transfer



In the next section, we show that this suggestion can provide the possible answer to the parametric question on Q-float straightforwardly.

4. Analysis

This section aims to explain how two types of Transfer can provide theoretical explanations for the parametric variations of Q-float. As shown previously, while some varieties of English allow FQ to be stranded in the edge of CP or vP position, some do not. Let us suppose that Strong and Weak Transfer result in different labeled structures, as shown in (11), and Q-float can occur in the phase edge due to the landing site of the associate of FQ. In that case, there are at least four possibilities to be considered: the ban on Q-float (i) in Spec-CP and vP, (ii) only in Spec-CP, (iii) only in Spec-vP, and (iv) the allowance of Q-float in any phase edges.

First, we consider West Ulster English and East Derry English varieties, which allow FQ to be floated in the intermediate Spec-CP position, repeated below.

(12) What did he say all that he wanted to buy t? (=(1a))

We assume that the phase head C in these varieties, which show Q-float in the edge of CP, leads to a Weak Transfer. Boxed elements denote the domain of Weak Transfer.

- (13) a. he wanted to buy [α all [what]]
 b. [α all [what]]_i [β that he wanted to buy t_i]
 c. [what]_j did he say [γ [α all t_j]_i [β that he wanted to buy t_j]]
(α =Q, β =CP, γ =QP)

Following Shlonsky (1991), we assume that FQ is a head of Q, taking DP as its complement, so the Q head *all* takes the *wh*-phrase *what* as its complement, forming the set α in (13a). Then, a phase head C is introduced into the derivation, and the set α moves to the edge of CP position in (13b). In this case, the C head triggers Weak Transfer, so the boxed elements are preserved in narrow syntax. In (13c), the *wh*-element moves to the matrix Spec-CP, stranding FQ in the intermediate landing site. LA correctly labels this structure: α is detected as Q, β as CP, and γ as QP. We should note that the label α is determined as head-level Q, not phrasal-level QP. This idea comes from the analyses of Chomsky (2013), Maeda (2021), and Kawamitsu (2021). They propose that the lower copies created by movement are strictly invisible for LA. Kawamitsu (2021), for example, argues that “[w]hen the XP moves out of the set {H, XP}, the label of this set is determined as H, not HP (Kawamitsu (2021: 114)).” The

label β in (13) is detected as CP since Weak Transfer renders the complement of the phase head preserved in the derivation by the proposal mentioned in (11b). Hence, LA decides the label γ , formed by $\{Q, CP\}$, as QP. The labeling failure does not arise in this derivation thanks to Weak Transfer, so the varieties, which allow FQ in the edge of CP, are theoretically possible. Recall that East Derry English allows FQ-stranding in Spec-vP in addition to Spec-CP.

- (14) What did he all say that he did in Derry? (EDE; Henry (2012: 31))

Let us assume that the phase head v triggers Weak Transfer in varieties that allow FQ-stranding in the Spec-vP. Then, the parallel labeling procedure with the C head, which triggers Weak Transfer, can be obtained.

- (15) a. he did [α all [what]] in Derry
 b. [[α all [what]]]_i [β say [t_i that he did t_i in Derry]]
 c. [what]_j did he [γ [α all t_j] [β say [t that he did t in Derry]]]]
($\alpha=Q, \beta=vP, \gamma=QP$)²

The set α containing FQ and its associate is merged in the object position in the embedded clause in (15a). In (15b), the main verb is introduced into the derivation, and the set α moves to the Spec-vP position in a successive-cyclic fashion. Then, Q-float occurs in (15c), so the *wh*-phrase moves to the matrix Spec-CP, stranding the FQ in the Spec-vP. The labels α , β , and γ are detected at the timing in (15c). *Wh*-movement out of the set α makes this label Q by the assumption that lower copies do not contribute to labeling. The phase head v in these varieties triggers Weak Transfer, and the complement of v is still in the narrow syntax. Hence, β is decided as vP. the set γ formed by $\{Q, vP\}$ is labeled as QP. The labeling failure does not arise in this structure, so FQ-stranding in the Spec-vP is licensed in varieties like East Derry English and South Derry English.

As we have observed so far, labeling with Weak Transfer does not cause problems of projection so that FQ can float in the edge of CP or vP. Below, we argue that the opposite result appears for labeling with Strong Transfer: Q-float in the edge of CP or vP is banned when these phase heads trigger Strong Transfer. Let us now consider the South Derry English and Strabane English varieties, in which FQ

stranded in Spec-CP is prohibited.

- (16) * What did he say all that he did on holiday? (= (4b))

We assume that the C head triggers Strong Transfer in these varieties and show the derivation below. Shaded materials denote the domain of Strong Transfer.

- (17) a. he did [α all [what]] on holiday
 b. [α all [what]]_i [β that [he did t_i on holiday]]
 c. [what]_j did he say [γ [α all t_j]_i [β that [he did t_i on holiday]]]
 ($\alpha=Q, \beta=C, \gamma=??$)

The set α merged with the verb in the embedded clause in (17a) moves to the intermediate landing site of CP after the C head participates in the derivation, as shown in (17b). Q-float arises in (17c), and the *wh*-phrase is internally merged with the matrix CP. Then, LA detects each label in the structure, but in this case, β is labeled as C, not CP. This is because the complement of *that* is strongly transferred to the interfaces, and no elements within the transfer domain are not visible for LA based on the proposal in (11a). Hence, the label γ formed with $\{Q, v\}$ cannot be detected due to the Head-Head configuration. As suggested in section 3.1, this configuration in question cannot be labeled by LA. As a result, the illegible labelless structure arises in this derivation so that ungrammatical sentences are expected if Q-float appears in the intermediate edge of CP in the varieties of South Derry English and Strabane English. In addition to the ban on Q-float in Spec-CP, FQ in Spec-vP is not allowed in the Strabane English variety, repeated below.

- (18) * What did he all do in Derry? (= (5a))

Let us assume that the v head leads to Strong Transfer in this variety.

- (19) a. do [α all [what]] in Derry
 b. [α all [what]]_i [β do [t_i in Derry]]
 c. [what]_j did he [γ [α all t_j]_i [β do [t_i in Derry]]]
 ($\alpha=Q, \beta=v, \gamma=??$)

After the set α is externally merged with the verb in (19a), it moves to the edge of v in order to evacuate from the transfer domain in (19b). In this case, the complement of v is strongly transferred so that the shaded area is not visible in syntax. In (19c), the *wh*-phrase moves to Spec-CP stranding FQ in the intermediate landing site, Spec-

vP. However, this derivation expects the labeling failure in γ . Since α is labeled as Q and β as v, the label γ cannot be decided due to the Head-Head configuration of $\{Q, v\}$. Consequently, the ban on Q-float in Spec-vP in Strabane English is expected.

In summary, we have suggested that parametric variations observed in the Q-float phenomenon are theoretically explained if we assume two types of Transfer operations: Strong and Weak. We argue in terms of the labeling theory that labeling with Strong Transfer cause problems of projection in some varieties due to the Head-Head configuration. On the other hand, the varieties which allow FQ in the phase edge have strategies to result in properly labeled structure thanks to Weak Transfer. These parametric distinctions tackled in this paper are summarized in the following table:

	EDE	SDE	StE
Stranding FQ in Spec-CP	✓	*	*
Stranding FQ in Spec-vP	✓	✓	*
Transfer option in CP	Weak	Strong	Strong
Transfer option in vP	Weak	Weak	Strong

Table 2: Two-way Options of Transfer

5. Concluding Remarks

There can still be some remaining problems in this analysis. However, we believe that the aim of this paper, which is to handle the parametric distinctions by assuming only the language-specific Transfer operation, contributes to the validity of the spirit of the Strong Minimalist Thesis. Our analysis can be extended to other parametric mysteries if it is on the right track. We leave these points for future research.

Notes

* I am greatly indebted to Nobuaki Nishioka for his valuable comments and suggestions. I would also like to thank graduate students of the English department of Kyushu University for their constructive comments. Needless to say, all remaining errors and inadequacies are my own.

¹ Throughout the article, we focus on FQ *all*, and we do not concern with the differences between *all* and other FQs, such as *both* and *each*.

² One might wonder whether a selectional problem arises between T and v since T does not select the vP label but the QP label in this structure. If FQ cannot strand in Spec-vP in general for the reason of selection relation, then Q-float sentences cannot be used as supporting evidence of successive-cyclic movement, at least in the vP phase level.

References

- Bošković, Željko (2004) “Be careful where you float your quantifiers,” in *Natural Language & Linguistic Theory* 22, 681-742.
- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89–155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2004) “Beyond Explanatory Adequacy,” *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures* 3, ed. by Adriana Belletti, 104–131, Oxford University Press, Oxford.
- Chomsky, Noam (2008) “On phases,” *Foundational issues in linguistic theory: Essays in honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos Peregrin. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133–166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2013) “Problems of projection,” *Lingua* 130, 33-49.
- Epstein, Samuel, Hisatsugu Kitahara and Daniel Seely (2012) “Structure building that can’t be!,” In M. Uribe-Etxebarria and V. Valmala (eds.), *Ways of structure building*, 253-270. Oxford University Press.
- Henry, Alison (2012) “Phase Edges, Quantifier Float and Nature of (Micro-) Variation” *Iberia* 4, 23-39.
- Kawamitsu, Jun (2021) “A Labeling Analysis of Quantifier Float in English,” *Kyushu University English Review* 63, 107-128.
- Maeda, Masako (2021) “Labeling in Inversion Constructions,” *English Linguistics* 38 (1), 91-105.
- McCloskey, James (2000) “Quantifier float and *wh*-movement in an Irish English,” *Linguistic*

Inquiry 31, 57-84.

Narita, Hiroki (2011) *Phasing in full interpretation*. Harvard University Ph.D. thesis.

Obata, Miki (2017) “Is Transfer strong enough to affect labels?,” In Leah Bauke & Andreas Blümel (eds.), *Labels and Roots*, 117-126, Mouton de Gruyter.

Ott, D. 2011. A note on free relative clauses in the theory of phases. *Linguistic Inquiry* 183–192.

Shlonsky, Ur (1991) “Quantifiers as Functional Heads: A Study of Quantifier Float in Hebrew,” *Lingua* 84. 159-180.

Sportiche, Dominique (1988) “A Theory of Floating Quantifiers and its Corollaries for Constituent Structure,” *Linguistic Inquiry*, 19, 425-449.

Takita, Kensuke, Nobu Goto, and Yoshiyuki Shibata. 2016. Labeling through Spell-Out. *The Linguistic Review* 33:177–198.